

‘古代ウイグル語’におけるインド来源借用語彙の  
導入経路について

庄垣内 正弘  
(京都大学)

On the routes of the loan words of Indic origin  
in the Old Uigur language

SHŌGAITO, Masahiro  
Kyōto University

There has not been any systematic study as to how the loan words of Indic origin got introduced into the Old Uigur language. In this paper I attempted to describe the differences between forms of Indic origin in Uigur documents and their counterparts in Sanskrit, to give a systematic description of the fact that the differences directly reflect the forms in the intermediary languages, although they can be supposed to have originally come from Indic languages other than Sanskrit.

For this purpose the following steps were taken. Firstly, I paid particular attention to the finals of the relevant forms. Although they show great differences from the Sanskrit counterparts (as basic forms for comparison), it was found that with a few exceptions the differences show a certain regularity with respect to the relation between the Uigur finals and the phonological characteristics of the Sanskrit finals, and between the Uigur finals and the meanings of these Uigur words. This regularity in turn can be shown to conform to the relation which Tocharian exhibits with the forms of Indic origin. It was also found that a small number of Uigur words of Indic origin which have not the ‘canonical forms’ have also deviant forms in Tocharian.

Secondly, except for the finals, there are also basic similarities with Tocharian forms. That is, forms which differ from their Sanskrit counterparts in Uigur are also found to show parallel differences from Sanskrit in Tocharian.

In both cases (word finals and non-finals), some Uigur forms do not accord with the Tocharian forms of the same word. They are variants due to the nature of the documents they appear in, and very few are incorporated into the Uigur language. These forms came through Sogdian or some other languages.

From the above procedure it was sufficiently demonstrated that the loan words of Indic origin came essentially through Tocharian. These loan words are later borrowed into Mongolian from Uigur directly, a fact which suggests

to us the possibility of reconstructing forms, unattested in Tocharian and Uigur from Mongolian forms; e.x. Mong. bandab (name of a mountain, Skt. pāṇḍava) <Uig. \*pandap~\*pantap<Toch. \*pāṇḍap.

In concluding, I would like to point out that from the research on the loan words of Indic origin we can see that the Uigur Buddhism in its early period was closely connected with Tocharian Buddhism.

## 0. 序

1. 語末形式と仲介言語について
2. 音韻形態上の考察

## 3. 借用語彙の定着について

## 4. 結論

### 0. 序

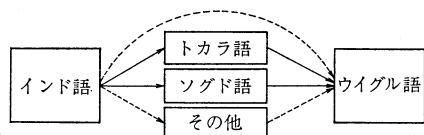
大多数のウイグル語<sup>1)</sup> 文献はいわゆる翻訳仏典である。仏教用語は原典言語をウイグル語に意識したウイグル語形式もみられるが<sup>2)</sup>、普通は外国語から借用した形式を使用する。借用語には中国語、トカラ語、ソグド語、チベット語、蒙古語などを来源とするものもみられるが、インド来源の形式が圧倒的多数を占めているといえる。しかしこれはウイグル仏典の大部分がインド語原典から直接に翻訳されたことを意味するのではない。ウイグル仏典の多くはインド語からの直接の翻訳というよりはむしろ中国語、トカラ語、チベット語あるいはソグド語などを通した重訳であったと考えられる<sup>3)</sup>。インド来源の借用語はそのように数種類の翻訳原典言語を通したにも拘わらず原則的には常に同一の形式で現われる。このことはこれらの形式がウイグルへの仏教伝播の初期の時代に導入され定着普及した形式であるという事実を意味するものである。ウイグル語研究者は久しくこれらのインド来源語彙がサンスクリットからの直接の借用形式であると考える傾向にあった。

しかし両言語間には、お互いの文字組織あるいは音韻構造の違いから当然生じるであろう形式上の相違に関して、予想できる一般的差異の範囲では説明不可能な大きな相違が対応語彙全体にわたって観察される。このことはウイグル内の借用形式が単純にサンスクリット形式を反映したものではなく、むしろサンスクリットに類似した別の言語形式から借用したのではないかという疑いを懐かせる。サンスクリット以外のインド系の言語としてはプラークリットあるいはブラークリットとサンスクリットの混淆言語である、いわゆる buddhist hybrid sanskrit を想定することができる。そして、このような言語内にウイグル形式と一致する形式を探り当てることももちろん可能である。だが上で述べたごとくウイグル語仏典の多くは重訳文であって、ウイグル語内に定着したインド来源の借用語も第3言語を仲介して導入された可能性は十分に考えられる。もしそうだとするならばウイグル形式にみられる変形は仲介言語形式の影響によるものと推定してよい。実際これまでもサンスクリットからみて大きく変形した形式に関しては中国語、トカラ語、ソグド語、サ

- 1) ここにいうウイグル語とは8世紀~14世紀のいわゆる‘古代ウイグル語’と呼ばれているチュルク語の1方言である。
- 2) atı kötrülmis̄ 「世尊」 kirtütin kälmiş 「如来」 ayarqa tägimlig 「尊者」 tilday basuduči 「因縁」 ozmaq qutrulmaq 「解脱」 etc.
- 3) 重訳は、ソグド語以外は仏典の奥書から証明される。又、ソグド語あるいはソグド文化との接触を考えた場合にソグド語を通してウイグル語訳された仏典の存在も当然推定される。

カ語などの仲介が推定されてきた。又、特に“*Maitreyasamiti*”のごときトカラ語からの翻訳文献が発見されて以来、それまではサンスクリットから直接借用されたと考えられていた若干の単語がトカラ語を仲介したと考えられるようになった。しかしこのような仲介言語の決定は偶々サンスクリットより似ていると思われる形式が別の言語中に見出されたという個々の単語形式の相対的類似に頼ってなされたものであって、形式の類似性についての体系的説明がなされたことはなかった。

ここでは、ウイグル語内に定着したインド来源語彙が如何なる経路によって導入されたかを解明するために、先ず、このような語彙の全てがサンスクリット以外の何れかの仲介言語を経由して導入されたものと仮定したい。次に、仲介言語としては当時トゥルファン盆地に共存した数種類の言語が想定できるが、これまでに提供された情報の内で、若干の信頼できる特に特異形式の比較例から判断すれば、トカラ語とソグド語がその役割に対して最も積極的であったと推定できる。それ故ここでは一応この2言語が原則的にはインド来源語彙導入に際しての基本的仲介言語であったと仮定したい。そして以下にはこの2つの仮定に基づいて、ウイグル語内の全てのインド来源語彙の導入経路に関して総合的に検討を加えていきたい。



上で仮定した内容はこの図の実線の部分で示されているが、来源言語であるインド語とは別に、便宜的にサンスクリットを基本形としてこの図の外に設定したい。基本形の形式は今後各言語内の借用単語形式の変化の尺度

となる。

なお、ウイグル文献内に現われる全てのインド来源借用語は本来仏教用語として導入されたものとはここでは考えたい。

uig. '古代ウイグル語'	ong. 蒙古語
toch. トカラ語	chin. 中国語
sogd. ソグド語	sak. サカ語
b. sogd. 仏教ソグド語	tib. チベット語
m. sogd. マニ教ソグド語	
skt. サンスクリット	
ind. インド語 (古代及び中期)	

# はゼロを表わす。

$A \begin{bmatrix} B \\ C \end{bmatrix} \begin{bmatrix} D \\ E \end{bmatrix}$  は  $A \begin{matrix} B-D \\ C-E \end{matrix}$ ,  $A \begin{bmatrix} B \\ C \end{bmatrix} \begin{bmatrix} D \\ E \end{bmatrix}$  は  $A \begin{matrix} B & \times & D \\ C & \times & E \end{matrix}$  の関係を表わす。

以下に掲げる uig. 形式の単語は参考文献 I より引用した。

### 1. 語末形式と仲介言語について

1.0 uig. における ind. 来源の借用語彙を skt. と比較した場合に、両者間にみられる形式上の最も顕著な相違は語末形式にあるといえる。たとえば、skt. の語幹形式 *anityatā* (f.) *upagupta* (m.) は uig. では常に *anityat upagupti* の形式で現われる。uig. のこの語末形式 -# 及び -i は skt. の格語尾形式を反映した形式とは考えられない<sup>4)</sup>、又 uig. の音韻構造上からもこのような語末形式の現われねばならない必然性はない。

曾て Staël-Holstein は W. Radloff と共に仏典 “*Ṭisastvustik*” (*Tiś*) について研究しその中に現われるブラーフミー文字の音写形式を伴った uig. 語彙について言及した際、これらの単語が、人名を表示するときには skt. -a 語幹はウイグル文字で -i に、ブラーフミー文字で *ī e* に、skt. の -ā 語幹は -a あるいは -i に、ブラーフミー文字で *ā* ある

4) *upagupta*(m.) の格変化形には *upagupte* が現われるがこの形式は *locative* に相当していて、uig. に借用されたとは考えられない。

いは e (i) に転写され、それ以外の意味を表示する単語は *skt.* の語末母音を表示しないという簡単な解説をなした<sup>5)</sup>。

基本形である *skt.* からみた語末形式の変形は単に上記仏典のみではなく広くウイグル文献全般にわたって窺うことのできる現象であるにも拘わらずこの1910年に発表された彼の意見はその後注目されることはなかった。そして *uig.* 研究においてこのような語末形式の変形は *uig.* と *skt.* の対応単語の同定に際しては無視されるのが普通であった。

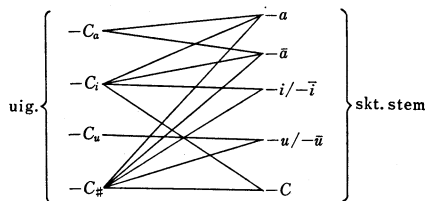
しかし、*uig.* の語末形式の変形が *uig.* と *skt.* の対応語彙間の音韻論上の情報においては説明することが困難である現在、単語の意味が語末形式と関係するというこの意見は当然注目されるべきものであって、ここで吟味し直してみる価値は十分にある。

しかも仮りに語彙論上の意味情報によって語末形式の変形が整理され、その中に何らかの規則性を見付け出すことができたなら、その規則性は *uig. skt.* 以外の第3言語、即ち仲介言語の影響によって *uig.* 内にもたらされたものであるという可能性も十分に予想できる。

それ故ここでは先ず単語のもつ意味との関連性に注目しながらウイグル文献内の *ind.* 来源語彙の語末形式について考察してみたい。

### 1.1 ウイグル語におけるインド来源語彙の語末形式について

*ind.* 来源 *uig.* 語彙の語末形式は文献内で *-Ca -Ci -Cu -C#* の4種類の形式に分かれて現われる。一方これに対応する *skt.* は子音語幹の他に *-a -ā -i -ī -u -ū* の6種類の母音語幹がみられるが確認できる両者間の対応関係は次のごとく図示できる。



以下にはこの図の実線で結ばれた関係について順次分析記述して行きたい。

#### 1.1.1 *skt.* -a 語幹と *uig.* の語末形式

##### 1.1.1.1 *uig.* -# 形式

1° *uig.* 単語が普通名詞表現の場合には 1.1.2 2°3°4°に該当する単語を除いては規則的に -# 形式をとる; *Skt. abhiṣeka: uig. abišik* 「灌頂」 *akṣara: akṣar* 「文字」 *kalpa: kalp* 「劫」 *nirvāṇa: nirvan* 「涅槃」 *maṇḍala: mantal* 「曼荼羅」 *mahāyāna: maxayan* 「大乘」 *paramārtha: paramart* 「波羅末陀」 *udumbara: udumbar* 「優曇華」 *lakṣaṇa: lakṣan* 「相」 *kuśalamūla: kuśalamul* 「善根」 *adhiṣṭiphalā: adipatipal* 「増上果」 *saṅghārāma: saṅram* 「僧伽藍」 *kṣaṇa: kṣan* 「刹」 etc<sup>6)</sup>。

2° 固有名詞表現の場合には 1.1.1.2 1° に該当する単語を除いたものは規則的に -# 形式をとる; 地名—*kaśmīra: kaśmir* *magadha: magat* *pūrvadeśa: purvadiś* *rājagṛha: račakrq* *vipula: vipul* *jetavana: čitavan* *jambudvīpa: čambudvip* *mahācīnadeśa: maxačīnadiś* 山名—*kukkuṭapāda: kuktapat* *udaya: uday* 河川名—*sita: sit* 寺院名—*tāmasavana: tamasavan* 經名—*daśakarmapṭha avadānamāla: daśakrmapuda awtanamal* etc<sup>7)</sup>。

##### 1.1.1.2 *uig.* -i 形式

1° *uig.* 単語が人、仏、菩薩などの人格名、鬼神、天神などの神格名を表わす固有名詞表

5) *Tiś* pp. 116-119.

6) この類に属する単語は他にも多数掲げることができるが、ここでは省略する。

7) この類に属する単語としてここでは更に天界名称を補足しておきたい; *skt. paritābha: uig. paritab* 「少光天」 *ābhāsvara: abasvar* 「光音天」 *apramānābha: apramanab* 「無量光天」 *apramānasubha: apramanasub* 「無量淨天」 *tusita: tužit* 「兜卒天」。

現の場合には規則的に *-i* 形式をとる; 人名—*caṣṭana: caṣṭani jayasena: cayasini jivaka: śivaki dhantipāla: dantipali kalmāṣapāda: kalmaśapati kumāra: kumari sutasoma: sutasomi anāthapiṇḍika: anāthapindaki nāgārjuna: nagarćuni vināyaka: vinayaki* 仏名—*mahādhwaja: maxadivaći prabhaṅkara: prabaṅkari ratnapuṣpa: ratnapuṣpi samantaprabha: samantaprabhi* 菩薩名—*sārdūla: śarduli caramabhavika: śaramabhaviki kāñcana-naḥoṣa: kañcanakuśi* 神格名—*urumukha: urumuki subhūma: subumi pañcika: pañciki agnikeśa: agnikeśi mahēśvara: mahēśviri mahādeva: mahādivi* etc<sup>8)</sup>.

2° 普通名詞として現われる語彙中, 人格の身分, 所属を表示する単語の数は少ないが, このような単語は一般に *-i* 形式をとる; *yogačāra: yogačari* 「瑜伽師」*sārthavāha: sartaavaki* 「商主」*purohita: puroxiti* 「近臣」*parivrajaka: parivaračaki* 「普行」*saṅghasthavira: saṅgistviri* 「僧院の長老」*nirgrantha: nigranti* 「尼乾子」 etc.<sup>9)</sup>

3° 普通名詞の内, 鬼神の類名は一般に *-i* 形式をとる; *kiṃnara: kinari* 「緊那羅」*ghandharva: gandarvi* 「乾闥婆」*asura: asuri* 「阿修羅」*mahoraga: maxuragi* 「摩睺羅加」*yakṣa: yakṣi~yakṣ* 「夜叉」*bhūta: buti* 「部多」*pūtana: putani* 「布怛那」*kaṭapūtana: ka-*

*taputani* 「羯吒布怛那」*piśāca: piśāci* 「毘舍遮」*kumbhāṇḍa: kumbanti* 「瓶腹」

但し例外的に次のような *-#* 形式もみられる;

*preta: prit* 「俄鬼」*raḥṣasa: rakṣaz* 「羅叉」  
4° 動物名を表示する普通名詞も一般には *-i* 形式をとるといえる; *mātāṅga: mātāṅghi* 「象」(TVIII) *kañjara: kañčari* 「象」*khaḍga: kadgi* 「犀」*kalviṅka: kalvaṅki* 「郭公」*garuḍa: garuḍi* 「金翅馬」<sup>10)</sup>

Skt. *-a* 語幹に対応する uig. 形式にはこの他に *-a* 形式もみられるが, この形式は例外として取り扱うことができる (cf. 1. 4. 1. 6).

### 1. 1. 2 Skt. *-ā* 語幹と uig. の語末形式

#### 1. 1. 2. 1 uig. *-#* 形式

1° uig. が普通名詞表現の場合には 1. 1. 1. 1.

1° と同様に規則的に *-#* 形式をとる; *pāramitā: paramit* 「波羅蜜」*simā: sim* 「四摩」*anityātā: anityat* 「滅」*āśleṣā: aśliṣ* 「柳」*maghāmak* 「星」*lalanā: lalan* 「左神経」 etc.

2° uig. が 1. 1. 2. 2 を除く固有名詞表現の場合には 1. 1. 1. 1. 2° と同様に規則的に *-#* 形式をとる; 地名—*mithilā: mitil* *abhāvapurā: abavapur* 河川名—*gaṅgā: gaṅ* 民族名—*mathurā: matur* 経名—*vajracchedikā: vačračitak* *padmālaṅkārā: padmalaṅkar* (cf. BM 2 pp. 021–022) etc.

8) この類の単語は他にも多い。なお, uig. では skt. の語末が *-y-a* の場合には単語の意味に関係なくこの音連続は単に文字 *y* で表記されるのでここでは扱わなかったが, これは uig. の語末が全て */-y/* あるいは */-i/* に中和されたことを意味するのではなく, このような文字 *y* は子音の後では */-i/* 又は */-yi/* を, 母音の後では */-y/* 又は */-yi/* の音素を表示していたものと考えられる (cf. 2. 112. 3°)。即ち *-#* 形式と *-i* 形式は音韻レベルでは区別されていた; *āsaya: aśay/aśay* 「阿世耶」*akṣobhya: akśoby/akśubyi* (仏名)。

9) 人格界の階層階級を表わす次のような名称には *-i* 形式は付かない; *pratyekabuddha: pratikabut* 「独覚」*śrāvaka: śiravak* 「声門」*prthagjana: partakān* 「凡夫」*caṇḍāla: candal* 「施茶羅」*brāhmana: braman* 「バラモン」。一方, 小乗経内の部派名が *-i* 形式で現われるのは, 「……に所属する者」の意味で用いられていたためであろう (cf. 1. 1. 4 1°); *mahāsaṅghika: maxasaṅgi* 「大衆」*sṭha-viraka: istaviriki* 「上座」*haimavata: xaimavati* 「雪山」*ekavyāvahārika: ikavyavaxariki* 「一説」*kaukkūṭika: kokutiki* 「鷄胤」*caitika: čaitiki* 「制多山」*uttaraśailaka: utiraśailiki* 「北山住」*mahīśāsaka: mrkiśāsaki* 「化地」 etc. (BM<sub>2</sub> pp. 030–032)。

10) 動物名称は鬼神類名と重なることがある。鬼神八部衆名中の *mahoraga* (cf. 3°) は「蛇」の意味であり, この *garuḍa* もその中に加えられる。

## 1.1.2.2 uig. -a/-i 形式

uig. が人格, 神格名を表わす固有名詞の場合には 1.1.1.2.1° の場合と異って, -i 形式をとる単語と -a 形式をとる単語とに分かれる。この区別には特に法則性はみられないが, 統計的には -i より -a 形式の方が優勢であるといえる。

1° -a 形式; 女人名—*supriyā*: *supriya viśā-khā*: *viśaka bhadrā*: *badra* 女神名—*trijatā*: *taričanta ekarakṣā*: *ikarakṣa duṣṭā*: *duṣṭa lambikā*: *lambika śamikā*: *śamika jayā*: *čaya puṇḍarikā*: *puntarika*.

2° -i 形式; 女人名—*nandā*: *nante* (TVIII) *nandabalā*: *nandabali mällikā*: *maliki* 女神名 *sitātapatrā*: *sitatapadri somā*: *somi*.

## 1.1.3 Skt. -i/-ī, -u/-ū 語幹と uig. の語末形式

Skt. の狭母音及び円唇母音語幹に対応する uig. 形式は単語の意味とは関係なく, 全ての種類の単語において規則的に次のような対応関係を示す。

1° Skt. -i/-ī: uig. -i; *rājabhūmi*: *račabumi pañčālakari*: *pañčalakari ḍākinī*: *takini pra-jāpati*: *pračapati*.

2° Skt. -u/-ū: uig. -u; *dhātu*: *datu punarvasu*: *punarvasu jambū*: *čambu*.

但し, 若干の uig. 形式は例外的にこのような -i, -u を欠落させる (cf. 1.4.1.4)。

## 1.1.4 Skt. -C 語幹と uig. の語末形式

Skt. の子音語幹に対応する uig. 形式も一般には単語の意味と関係なく次のような対応関係を示す。

1° Skt. -in: uig. -i; *śāstratantrin*: *śāstratantri ratnaśikhin*: *ratnaśiki śikhin*: *śiki vipaśyin*: *vipaśi śreṣṭhin*: *śiriśdi* 部派名—*sarvāstivādin*: *sarvastivadi prajñaptivādin*: *piratyaptibadi sautravādin*: *sotiravadi* etc.

但しこの中には例外的に次のような -# 形式単語も含まれる; *anāgāmin*: *anagam*

*sakṛdāgāmin*: *sakardagam cakravartin*: *čakra-vart*.

2° Skt -jit: uig. -ci; *prasenajit*: *prasānci abhijit*: *abici*. 但し -jit は “winning, acquiring” の意義をもった複合語の支分構成要素である。

3° Skt. -C: uig. -C (1° 2° を除く); *arhant* *arhant*.

1.1.5 uig. と skt. の語末形式について, 単語の表わす意味との関連性に基いた両者間の対応関係を示したが, 関与する単語の意味は, skt. のもつ本来の意味ではなく, むしろ uig. 側で表現されている意味内容である。たとえば skt. *sāgara* は本来的には「海」を表示する単語であるが, uig. 側の *sagari* は固有名詞の王名を表現するのに用いられたために語末に -i 形式が現われたのである。それ故, 上掲例中の菩薩名, 鬼神名, 地名あるいは普通名詞, 固有名詞などの指定もウイグル文の内容から決定されたのである。このように uig. の語末形式が skt. ではなく, uig. 自身の単語のもつ意味によって左右されている事実は次のような skt. と uig. の対応例によって更に明確に説明できる。

skt. *arjuna*: uig. { *arčun* 植物名 (HI)  
                          *arčuni* 人名 (UII)

skt. *apasmāra*: uig. { *apasmar* 「癲癇」 (HII)  
                          *apasmari* 鬼神名 (UII)

skt. *ālambana*: uig. { *alamban* ‘basis, ground’ (ETS)  
                          *alambani* 鬼神名 (UII)

cf. skt. *ālambanā*: uig. *alambana* 鬼神名 (UII)

又, BM3 には skt. *sudaršana* に相当する uig. 形式が 11 箇所現われるが, 国王名として使用される場合 (6 箇所) と, 地名として使用される場合 (5 箇所) とで次の例のごとく -i 形式と -# 形式とに全てが明確に書き



1.1.7 Staël-Holstein の “Tišastvustik” に現われる ind. 来源語彙の語末形式に関する解説の内容は主旨上記規則の  $R_1R_2$  の(a),(b)に相当するものといってよい。そして今、この規則は他に  $R_6$  までを含めて、全 uig. 内の ind. 来源の借用語に対して一般に適用される事実が明らかになった。

しかし uig. のこのような語末形式の規則性は uig. 内部で独自に発生したものではなく、何らかの仲介言語の影響によるものと考えられる。これに関して Staël-Holstein は E. Leumann のいう Sprach II<sup>a</sup> と結びつけて考えたが<sup>13)</sup>、この Sprach II<sup>a</sup> は後に H. Lüders などによってイラン系言語のサカ語に同定された言語である<sup>14)</sup>。サカ語とチュルク語の接触の存在は以前から明らかにされているし<sup>15)</sup>、又 ind. 来源のサカ語形式の中には明らかに uig. 形式と関係づけられる単語もみられるので仲介言語としてサカ語を想定することは特に無理なこととは思えない (cf. p. 4-30)。ところが、語末形式について両言語を比較するなら、両者間には偶然と思われる個別的一致は存在しても、全体としての体系的一致は決してみられない<sup>16)</sup>。それ故、上のような uig. の語末形式の規則体系が sak. を仲介して導入されたという推定は成り立たない。

筆者はここで、uig. の語末形式を、0. で仲介言語と仮定した sogd. 及び toch. の 2 言語と比較してみたい。

## 1.2 ソグド語とウイグル語の語末形式の比

### 較

名詞の格変化をもつ言語は語幹か主格の形式で一般には借用される。uig. における sogd. を仲介した ind. 来源語彙が sogd. の語幹形式で導入されたのか、あるいは主格形式で導入されたのかについては、これまで深く考えられることはなかったが、この問題はここにおいては重要な意味をもっている。というのは、sogd. にはいわゆる light-stem と heavy-stem が存在するが<sup>17)</sup>、主格語尾形式として後者は -# 形式をとるが前者は -y(/i/) 形式をとるので、仮りに主格形式で uig. に導入された場合には、light-stem の語末形式はその単語のもつ意味とは無関係に、先行母音や音節構造の性質によるところの音韻論上の条件のもとに自動的に -y が決定されてしまい、上記  $R_1$  や  $R_3$  の uig. 形式と偶然の一致をまねく結果となる。たとえば、skt. *yakṣa*, *preta* は sogd. の主格形式では *ykśy*, *pr'yt* となつて、uig. *yakśi*, *prit* と同一と判断できる語末形式の対応 -i: -# を示しているが、これは前者の sogd. 形式が light-stem (*ykś-*)、後者が heavy-stem (*pr'yt-*) であるから偶々 uig. と一致する対応形式が主格に現われたのであって *ykś-y* の -y は単語の意味とは無関係である。しかしこのように語幹形式で導入されたのか主格形式で導入されたのかという問題に関しては次のように uig. に借用された m. sogd. 来源の単語形式からの類推によって一応説明することができる。uig. には多数の m. sogd. が借用されたが、その内で *roć* (a)ram *rošan* *zruść* の形式は

13) Tiš. p. 117. なお Sprach II<sup>a</sup> については E. Leumann, “Über die einheimischen Sprachen von Ostturkestan im frühern Mittelalter.” I ZDMG LXI 1907 II ZDMG LXII 1908 参照。

14) Má. p. 395.

15) Cf. H.W. Bailey “A Turkish-Khotanese Vocabulary” BSOAS 11 1944 pp. 290-296. “Turks in Khotanese Texts” JRAS 1936 pp. 92-94 etc.

16) e. x. skt. *gautama*: sak. *godama*: uig. *gautam dhāna*: jaṇa: *diyan nirvāna*: *nivana*: *nirvan pṛthagjana*: *prudhajana*: *partagcan śramana*: *šamano* etc. H. W. Bailey “The Khotan Dharmapada” BSOAS XI-3 1945.

17) light-stem と heavy-stem に関しては Ger. pp. 72-81 及び P. Tedesco “Ostiranische Nominalflexion” ZII iv 1926 pp. 94-166 参照。



m. sogd. の *rwé rm rwxśn zrwśc* の形式から導入された単語である。だがこれらの m. sogd. 形式は一般に light-stem として扱われるもので、主格形なら何れも -y をとらねばならない性質の単語である。即ちこれらの uig. 形式は m. sogd. の語幹形式を反映していると考えてよい。このような m. sogd. の uig. への導入方法を考慮するなら、sogd. を仲介した ind. 来源語彙も一般には語幹形式で uig. に導入されたものと推定することが可能である。

それ故以下には sogd. の語幹形式と uig. 形式とを対比させて検討したい。

1.2.1 uig. の語末形式規則  $R_1R_2$  においては、skt. -a 及び -ā 語幹に対して uig. では単語の意味に従って -i -a -# の3形式に分類できた。しかし sogd. においては uig. にみられるような区別は認められず、一般には -# 形式で表示される；  $R_1(a)$ ； skt. *kaniṣika*： sogd. 'knśk (Bn)； uig. kanišiki, *kumāra*： kwm'r (Bn)； *kumari*, *vasumitra*： β'swmytr (R)； *vaśumaytri*, *virūpākṣa*： β'yr'wp'kś(Bn)； *virupakśi*, *dīpaṃkara*： typ'nr (RII)； *dīpankari*, *indra*： 'yntr (Bn)； *intri*, *samanatabhadra*： sm'ntp'tr (Bn)； *samantabadri*, (b)； *amoghapāsā*： ''m'wkp's (Bn), *ghaṇṭikā*： kntyk (Bn)。

又、-# 形式以外に -a 形式の現われることもあるが両形式の区別に規則性はみられない；  $R_2(a)$ ； *kalpa*： kδp'(Bn)； *kalp*, *saṃgha*： snk'(MK)； *saṃ*, *śloka*： śr'wk'(VJRBn)； *ślok* (b)； *laṅkā*： rnk' (Bn 経名)

一方 uig. の -i に相当する sogd. -y 形式は、地名表示の単語にしばしばみられるがこの -y は斜格語尾を表わしたものと考えられる； skt. *gr̥dhakūta*： sogd. krytkwty (Bn), *rajaṅgha*： r'čkry (Bn)； uig. račagrg, *mahasamudra*： mγ''nsmwtry (VJ)； maxasumudar.

1.2.2  $R_3$  において、uig. では skt. -a に対して -i 形式が現われるが、sogd. にはこのような規則性は認められず、一般には -# 形式が立つ； skt. *asura*： sogd. ''s'wr (MüBn)； uig. asuri (cf. 1.1.4.3), *kiṃnara*： kynntr (Bn)； *kinari* (cf. 2.2.2.1), *yakṣa*： ykś(Bn)； yakśi.

1.2.3  $R_4$  は skt. -i/-ī, -u/-ū に対して uig. では -i, -u が対応する。sogd. でも skt. *mahābodhi*： sogd. mγ'pwδy (Bn)； uig. maxabodi, *dhārṇi*： t'rny(R)； *darni*, *rāhu*： r'γw (Bn)； *raṅu* のごとく、uig. と同じ形式を示す例もみられるが、多くは次のように -# 形式で現われる； *vimalakīrti*： βymyrkr'yt (R), *ratnakīrti*： rtnkyrt (Bn), *śāntirūci*： ś'ntyrcw (MüII), *cintāmaṇi*： čynt'm'n(Bn)； *čintamani*, *sukhavati*： swk'βt (Bn), *lokadhātu*： rwkδ't (Bn) *kapilavastu*： kp'yrβst (Bn)。

1.2.4  $R_5$  では skt. -in に対して uig. では -i 形式をとった。sogd. にはこの skt. 語幹に該当する単語は skt. *cakravartin*： sogd. čkkrβrt (MüII) がみられるが、この -# 形式は uig. の例外形式である čakravart と一致する。

1.2.5  $R_6$  に該当する sogd. には skt. *prasenajit* に対応する形式 prsn'yčy (MüII) がみられるが、この sogd. 形式は uig. の prasānī と一致する。

1.2.6  $R_6$  は skt.-C に対して uig. も同じ -C 形式の対応する規則であるが、この規則は sogd. にも適用できる； skt. *arhant*： sogd. rγ'nt (R)； uig. arxant, *bhagavan*： pk'β'm (Bn) *brahman*： pr'γmn (Bn)。

1.2.7 以上、uig. と sogd. の語末形式について比較してみたが、全体の規則中には両言語間に一致する規則あるいは各規則中には部

分的に一致するところもみられたが、全体としての体系的な一致は認められない。特に  $R_1R_2R_3$  の//の右辺の条件は(即ち単語の意味に関するもの) sogd. 語末形式決定にとっては全く関与的なものではなく、更に uig. にとって特徴的形式といえる  $R_1R_3$  の -i 形式は sogd. には決して現われない。それ故、uig. における語末形式の規則性が sogd. 形式の反映によるものという推定は成り立たない。そして上掲の uig. 形式あるいは規則との若干の一致も原則的には偶然の一致と解釈せねばならない。

### 1.3 トカラ語とウイグル語の語末形式の比較

次に, sogd. 同様に仲介言語の1つと仮定した toch. の語末形式と uig. のものとを比較してみたい<sup>18)</sup>。但し toch. の語幹形式は主格形式と一致するものである。

1.3.1 uig.  $R_1$  に対して toch. では skt. と次のような規則的対応を示す。

$R_1(a)$ ; skt. -a: toch. -e~-ä skt. *mahendrasena*: toch. *mahendrasene* (AB 王名) *brahmadatta*: *brahmadatte*(AB 王名) *sāgara*: *sāgare* (AB 王名) *kātyāyana*: *kātyāyane* (AB 賢人名) *śāriputra*: *śāriputre* (A 仏弟子名)~*śāriputtrā* (B) *uttara*: *uttare* (AB 仏名)<sup>19)</sup> etc.

(b); skt. -ā: toch. -ā~-a *sujātā*: *sujātā* (A 比丘尼名) *bhadrā*: *bhadrā* (A 女人名)~*bhadra*(B) *malikā*: *malika* (A 女人名) *nandā*: *nānda* (B 女人名) *nandābalā*: *nandābala* (B 女人名) etc.

1.3.2 uig.  $R_2$  に対して toch. では skt. と次のような規則的対応を示す。

$R_2(a)$ ; skt. -a: toch. -# *kuśalamūla*: *kuśalamul* (AB) *kleśa*: *kleś* (AB) *kuṣaṇa*: *kuṣaṇ* (AB) *aḥṣara*: *aḥṣar* (A)~*aḥṣār* (B) 地名—*magadha*: *māgat* (AB) *jambudvīpa*: *jambudvip* (AB) *jetavana*: *jetavaṇ* (AB) 河川名—*nairāñjana*: *nairāñjaṇ* (B) 著作名—*udānālaṅkāra*: *udānalaṅkā* (B)<sup>20)</sup> etc.

(b); skt. -ā: toch. -# *anityatā*: *antiyat* (AB) *pāramitā*: *paramit*(AB) *vāsanā*: *wāsaṇ* (B) 地名—*laṅkā*: *lank*(A) *suddharmā*: *sudharm*(A) 河川名—*gaṅgā*: *gank*(AB) etc.

1.3.3 uig.  $R_3$  に対して toch. では skt. と次のような対応を示す。

人格の身分所属表示には skt. -a に対して一般に -e(〜ä) 形式が対応する; skt. *sārthavāha*: toch. *sārthavāhe* (AB) *purohita*: *purohite*(B~*purohit*(A)) *yogācāra*: *yogācāre* (AB) *ṭikākhāra*: *tikkakāre* (B 註釈家) *pañcavaṭika*: *pañcawarike* (B 僧院の長) *mahāśramaṇa*: *mahāśramaṇe* (B 托鉢僧) *abhidharmika*: *abhidharmike* (B 阿毘達磨の信奉者) *āgamadhara*: *agamadhare* (B 阿舎の信奉者) *nirgrantha*: *nigranthe* (B) etc.

鬼神類名の表示には skt. -a に対して -# 形式も現われるが、一般的には -e 形式の立つ傾向にある; *kiṃnara*: *kinnare* (AB) *gandharva*: *gandharve* (B~*gandharv* (A)) *asura*: *asuri* (B~*asur* (A)) *yakṣa*: *yakṣe* (B~*yakṣ* (A)) *rākṣasa*: *rākṣatse* (B~*rākṣats*

18) toch. の語幹末形式に関しては既に A 語について ToGr. pp. 55-62 にかなり詳細な記述がみられるが、ここでは uig. との対応関係を検討するに足るもう少し詳しい調査を A 語だけでなく B 語についても試みた。

19)  $R_1(a)$  の例として更に次の人名を補足したい; *rāvana*: *rāvane*(A) *mahāprabhāva*: *mahāprabhāve* (A) *mahādeva*: *mahādeve* (A) *dharmavara*: *dharmavare* (A) *āryadeva*: *aryatewe* (B) *ambara*: *ambare* (B).

20) uig. と同じく天界名はこのグループに入る; *tuṣita*: *ituṣit* (A) *suddhāvāsa*: *śuddhavās* (AB) *abhāsvara*: *abhāsvar* (A). 又, skt. *sudarśana* は uig. と同様に地名表示の場合と人名表示の場合で異った形式を示している; 地名—*sudarśaṇ* (AB) 人名—*sudarśane* (AB).

(A) *pretā*: prete (B~pret (A)) *kiṃkara*: kiṃkare (A 金伽羅) etc.

動物名表示の単語は -# 形式もみられるが、一般には -e(-ä) をとる傾向にあるといえる; *ulūka*: uluke (A 梟) *nāga*: nāge (B 蛇) *mārjāra*: mārjāre (B 牝猫) *nakula*: nakule (B カニクイマングース) *vṛṣa*: vṛṣe (B 牡牛) *kiśora*: kiśore (B 駒).

1.3.4  $R_4 \sim R_7$  に対して *toch.* では単語のもつ意味とは関係なく常に次のような *skt.* との対応を示す。

$R_4$ ; *skt.*  $\begin{bmatrix} -i/-ī \\ -u/-ū \end{bmatrix}$ : *toch.*  $\begin{bmatrix} -i \sim -e \\ -u \end{bmatrix}$

$R_5$ ; *skt.* -C: *toch.* -C

$R_6$ ; *skt.* -in: *toch.* -i~ī

$R_7$ ; *skt.* -jit: *toch.* -ji~cī

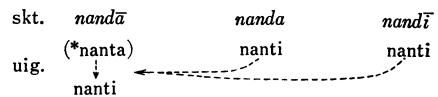
$R_8$ ; *udāyin*: udāyi (AB) *śikhin*: śikhī (A B) *ratnaśikhin*: ratnaśikhi (A) *paramārthadarśin*: paramārthadarśi (A) *śreṣṭhin*: śreṣṭhi (A) *yaṃtrācārin*: yaṃtrācāre (A)

$R_7$ ; *prasenañjit*: prasenañji(A)~prasenañcī(B).

1.3.5 *toch.* の語末形式と *uig.* のものとを語末規則に当てはめて比較してみたが、*uig.* の  $R_2(a)(b)$  及び  $R_5$  に関しては *toch.* でも同じように -# 形式及び -C 形式をとるので同一の規則を *toch.* に適用することが可能である。後述するごとく *toch.* 音の e ä は *uig.* では一般に i 音に対応するので、 $R_1(a)$  と  $R_3(a)$  における *skt.* -a: *toch.* e~ä の対応は、もしこれらが *uig.* に反映されたものとするなら、これらの規則に従う *uig.* の実際の対応である *skt.* -a: *uig.* -i と同一の対応形を示すことになる。又、*uig.* では *toch.* の長母音に対して一般に短母音表示でこれに対応するので、 $R_4R_6R_7$  における *skt.*: *toch.* の対応に関しても同様のことがいえる。

一方、 $R_1(b)$  では *uig.* は -a 形式と -i 形式が現われるのに対し、*toch.* では規則的に -a~ā 形式が現われる。従ってこの規則に関

する限り、単純には *uig.* と *toch.* の対応は 1/2 の一致しか示さないことになる。しかし、これについては更に次のことを考慮せねばならない。1)  $R_1 \sim R_7$  中で -a 形式の実際に現われるのはこの  $R_1(b)$  に限られるのであって、他の規則からの類推によって生じた形式ではなく、規則体系の重要な構成要素であること。2) この -i 形式は  $R_1(a)$  においては同一条件下で *skt.* -a に対して規則的に現われる有力な形式であって、-a 形式への類推が生じ易いこと。3) *skt.* -ā 語幹はしばしば -a -i -ī 語幹の類似単語をもつので、下図のごとく *uig.* 内でこのような類似単語の混用の可能性は強いと考えられること:



以上の3点から判断して、ここでは一応この -i 形式が -a 形式に従属する位置にあり、その多くは  $R_1(a)$  の // の左辺のオーバーラップによって生じた形式であると推定したい。それ故、この  $R_1(b)$  も基本的には *toch.* に適用できる規則であると考えてよい。

以上の結果、*uig.* 語末形式に対して設立された規則  $R_1 \sim R_7$  には  $R_1(b)$  のごとく基本的ではないが *uig.* *toch.* 間に若干の相違を示す規則も含まれているが、全体としては大旨 *toch.* に対しても適用できる規則体系であると判断できる。即ち、*uig.* と *toch.* の語末形式の様相は体系の一致を示すものといえてよい。そしてこの一致は本来仲介言語 *toch.* のもっていた体系が *uig.* へ反映された結果生じたものであると推定して差し支えない。

1.3.6 ところで、*toch.* には A, B の2つの方言が存在する。これまでこの2方言を区別することなく両者の単語例を手持ちの資料にまかせて掲げてきたが、一体 A, B の何れが仲介言語の主たる役割を果たしてきたのかと

いう問題については容易に解答を出せない。A と B とは本来 1 言語の 2 方言としては大き過ぎる程の相違を示す言語であるが、ただ借用語に関しては A も B も普通は非常によく似た形式を呈している。元来トカラ仏典の多くは A 語で書かれているので、これまでは *toch.* の仲介を経たと推定された *uig.* 形

<i>uig.</i>	A	B	<i>skt.</i>
yogačari	yogācāre	yogācāre	yogācāra
sartavaki	sārthavāhe	sārthavāhe	sārthavāha
puroxiti	purohit	purohite	prohita
parivaračaki	parivrājak	parivrājake	parivrājaka
nigranti	nigranth	nigranthe	nirgrantha
gandarvi	gandharv	gandharve	gandharva
asuri	asur	asure	asura
kinari	kinnare	kinnare	kiṃnara
buti	bhūt	x	bhūta
kunbanti	kumbant	x	kumbhaṇḍa
prit	pret	prete	preta
rakšaz	rakšats	rakṣatse	rakṣāsa

上掲例から判断して、*uig.* の規則形式には A ではなく B の方が適格な対応を示すことがわかる。このことから、 $R_3$  に限っては、むしろ B が仲介言語として存立し、例外形式である *prit rakšaz* のみを A の仲介が補ったと解釈することができる<sup>22)</sup>。しかし他の規則においては、AB のばらつきはそれほど大きくなく、その中には A に一致して B に一致しない規則形式の例もあるので<sup>23)</sup>、ここではあえて AB の何れか一方を仲介言語として指定することを避けて、両言語を合わせて 1 言語トカラ語として取り扱っていききたい。それ

式は一般に A 語形式の反映であると考えられてきた<sup>21)</sup>。しかし、たとえば上記規則の内  $R_3$  は *uig.* では規則的に *-i* 形式をとるものであるが、この規則に該当する AB のばらつきは大きく、今、例外形式をも含めてこの  $R_3$  に当る *uig.* 単語を *toch.* の A と B に対比させてみれば次のようになる；

故以下に掲げる *toch.* 単語に付けた AB の表示は原則的には論旨に直接関与するものではない。

#### 1.4 規則に従わない語末形式について

1.3 において、*uig.* の語末形式の様相が *toch.* のものと体系的に一致することを明らかにし、これが *toch.* 形式の *uig.* への反映であると推定したが、*uig.* 及び *toch.* 形式の中には  $R_1 \sim R_7$  の規則をはみ出すところの若干の例外的形式も又含まれている。このような異常形式は統計的にみて上記規則体系を

21) W. Winter は主に文献学的見地から、ウイグルと B の口語との接触のあったことを述べているが、ウイグルへの仏教伝導言語としては A を仮定している。“Tocharians and Turks” *UAS* Vol. 23 1963 pp. 239-251.

22) この他に、*uig.* では  $R_3$  からはずしたが、階層名表示の *skt. brāhmana* の *uig.* 形式は A と一致する；*uig. braman: toch. brāmaṃ* (A): *barāhmaṇe* (B).

23) *uig.* 形式に対して A B が対立する例として次のものを掲げることができる；

<i>skt. ānanda</i>	<i>uig. anand</i>	A ānand	B ānande
<i>pātra</i>	<i>badīr</i>	<i>pātār</i>	<i>pātro</i>
<i>anāthapiṇḍika</i>	<i>anatapindiki</i>	<i>anāthapiṇḍik</i>	<i>anāthapiṇḍike</i>
<i>maudgalyāyana</i>	<i>motgalyayani</i>	<i>maudgalyāyañ</i>	<i>maudgalyayane</i>

否定するに足るものでは決してありえないが、これらが何れの言語形式を反映したものか、そしてそれが両言語の語末形式の体系的な一致によって推定される *uig.* 形式語彙の *toch.* 形式からの基本的反映という考えに如何に関与するかについての検討は必要である。

例外的形式は両言語において次のような対応のタイプを示す;

- 1) uig. : (toch.)    は異常形式  
 2) uig. : toch. ( ) は正常形式又  
 3) (uig.) : toch. はゼロ

#### 1.4.1 上図の 1) 及び 2) のタイプについて

*uig.* 語末形式の異常が何れの言語形式の反映であるかを決定することはなかなか困難な仕事であるが、ここでは一応異常形式が仲介言語 *toch.* 及び *sogd.* の形式の反映によった形式であると仮定し、それを前提として次のような方式に則ってこのような語彙の導入経路を検討してみたい。

- (1) *uig.* 形式 = *toch.* 形式 ≠ *sogd.* 形式  
 (2) *uig.* 形式 = *toch.* 形式 *sogd.* ナシ  
 (3) *uig.* 形式 = *toch.* 形式 = *sogd.* 形式  
 (4) *uig.* 形式 = *sogd.* 形式 ≠ *toch.* 形式  
 (5) *uig.* 形式 = (*sogd.* 形式) *toch.* ナシ  
 (6) *uig.* 形式 ≠ *toch.* 形式 / (*sogd.* 形式)

但し、( ) 内の単語はゼロの場合もある。又、この場合の形式は語末形式をさす。

この6種類の条件のもとに、*uig.* と *toch.* あるいは *sogd.* 間に語末形式以外の仲介言語決定に有効な音韻、形態上の特徴的一致の存在しない限りにおいては、原則的に次のごとく仲介言語を推定することができる; (1)は *toch.* 仲介、(2)(3)は 1.3 の結果から *uig.* 形式と *toch.* 形式が体系的な一致を示す点を考

慮するならば、一応 *toch.* を仲介したものと推定できる、(4)は *sogd.* 仲介、(5)は *toch.* の資料の現われるまでは決定不可能、(6)は *toch.*, *sogd.* 以外の仲介言語の想定が必要である。

#### 1.4.1.1 R<sub>1</sub>(a) [skt. -a: *uig.* -i] に従わない *uig.* 形式

skt. -a: *uig.* -#; skt. *gautama*: *uig.* *gautam*  
*toch.* *gautam*(A) *sogd.* *k'wt'm'* 従って(1)より *toch.* 仲介と推定できる。*ānanda*: *anand* ~ *anant* (cf. 註30) *toch.* *ānand* (A~*ānande* (B)) *sogd.* ''n'nt, *nārāyaṇa*: *narayan* (~*narayani*) *toch.* *nārāyaṃ* (A) *sogd.* *n'r'y'n*, *kāśyapa*: *kaśip* (~*kāśyape* TVIII cf. 註33) *toch.* *kāśyap* (AB) *sogd.* *k's'yp*, *mahākāśyapa*: *maxakaśip* *toch.* *mahākāśyap* (A~*mahākāśyape* (B)) 以上の内、前の3例は(3)より、最後の例は(2)より何れも *toch.* 仲介と推定できる<sup>24)</sup>。*ratnakara*: *ratnakr* ~ *ratnakkr* (TVI) *toch.* *sogd.* の両言語中にこの対応単語が存在しないので(5)に該当するが、*r* の前で *k > kk* となるのはむしろ *sogd.* で一般的現象と考えられるところから、この TVI の *uig.* 形式は *sogd.* を仲介した疑いが濃厚である (cf. 2.1.3 3°)。なお、*āryāvalokiteśvara*: *arya-avalukdiśvar* (~*avalukdiśvari* < *toch.*) *sogd.* ''ry'βrwkδyśβr, *jeta*: *cit* に関しては何れも(5)に該当するので仲介言語の推定はできない。

#### 1.4.1.2 R<sub>2</sub>(a) [skt. -a: *uig.* -#] に従わない *uig.* 形式

skt. -a: *uig.* -i; *samudra*: *samdri* *toch.* *sāmudār* (~*sāmudtār* (A)) *sogd.* *sm'wtr* 従って(1)より *toch.* 仲介と推定できる。又、次の単語では *toch.* *sogd.* の対応単語は見当たらない<sup>25)</sup>; *kanyakubja*: *kanyakubči*

24) *narayani*, *kāśyape* は何れも正常形式であるのでこれらも *toch.* を仲介した可能性は強い。即ち *toch.* には正常形式も存在したと推定される。しかしもしそうでないとするならば、*uig.* の -# 形式のものが類推によって -i 形式に変じたと考えることができる。

25) skt. *ratna* に当る *uig.* は *ārdini* ~ *ratni* である。これに当る *toch.* 形式は見当たらないが、*sogd.*

*kuṣṭha*: kuṣṭi, *ayukṣaṇa*: ayukṣani *apramāṇa*: apiramani *vayneyka*: vayniki *ṣaṭka*: śatki *vāsa*: vasi この内 *kanyakubci* は地名を表示する固有名詞である。この形式が何れの言語形式の影響によるものかは判断できない。なお、それ以外は普通名詞の例であるが、toch. にも R<sub>1</sub>(a) あるいは R<sub>3</sub> の類推から普通名詞に -e~ä の現われる多くの例のみられることから、これらの uig. 形式が toch. の反映形式と推定して無理ではない<sup>26)</sup>。

(b) [skt.-ā: uig.-#] skt.-ā: uig.-i; *abhijñā*: abitiyi (cf. 2. 1. 1. 17°) toch. *abhijñā*(B) (2) より toch. 仲介と推定できる<sup>27)</sup>。

#### 1.4.1.3 R<sub>3</sub>[skt.-a: uig.-i] に従わない uig. 形式

skt.-a: uig.-#; *yakṣa*: yakiś (~yakśi) *maheśvara*: maxiśvar (~makiśvari) *asura*: asur (~asuri). 何れも -i 形式と併用されているが、これらの単語に対する toch. AB 及び sogd. 形式は次のごとくである。

toch. A	toch. B	sogd.
yakṣ	yakṣe	ykś
mahiśvar	mahiśvare	mγ'yśβr
asur	asure	's'wr

これらの対応形式から判断して、uig.-# 形式は何れも(3)に該当していることがわかる。それ故 3 者共 toch. AB から振り分けて導入されたと考えるのが順当であろう。実際 yakiś ~yakśi に関してはそのように推定できるが、maxiśvar は i の前で skt. h に対して x の

対応していることからむしろ sogd. 形式を反映した可能性が強いものといえる (cf. 2. 1. 3 5°)。一方 asur は音韻上の問題はないが、後述のごとく (cf. 3. 1), skt. *asura* に対しては uig. 内では一般に -i 形式が使用されているのであって、この異常形式はその変種として特定のソグド色の濃い文献にのみ現われる。それ故この場合の asur は特別に sogd. を仲介した形式と考えねばならない。なお、maxuragi (skt. *mahoraga*) の変種として現われる maxaruk も同じ理由のもとに sogd. 経由の形式と判断できる。

#### 1.4.1.4 R<sub>4</sub>[skt.-ī/ī: uig.-i skt.-ū/ū: uig.-u] に従わない uig. 形式

skt. \_\_\_\_: uig.-#; *aviçi*: aviś toch. *aviś* sogd. ''βyc~''βyčy, *bārāṇasi*: baranas (~banaras) toch. *bārāṇas maitreyasamiti*: maitrisimit toch. *maitreyasamit* (A)

最初の例は(3)及び 2.2.2.1 より、残りは(2)よりそれぞれ toch. 仲介と推定できる。一方、skt. *sumeru* に対応する uig. 形式は sumir (~sumur) と samir の 2 種類がある。前者は toch. *sumer* (AB) より借用されたと推定できるが、後者の形式は第 1 音節の母音から判断してむしろ sogd. sm'yr を仲介したものと推定すべきである。*śākyamuni*: śakimun (~śakimuni) toch. *śākyamuni* (AB) sogd. ś'kymwn, *vajrapāni*: vačirapan toch. *vajrapāni* (A) sogd. βčrp'n, *śrāvastī*: śravst toch. śrāvasti (AB) sogd. ś'r'βst

には rtn がみられる。uig. *ārdini* の変種として現われる *ratni* は TIX, MIII などのマニ教典中にみられるのでこの形式は sogd. を仲介した可能性が強い (cf. 3. 1.)。sogd. *rtn* は light-stem であるから、主格形は *rtn-y* となる。sogd. に *rtny* という語幹形式の見当たらない以上 uig. *ratni* は例外的にこの主格形式を反映しているものと判断できる。*ārdini* もこのような sogd. 主格形式が uig. 内で変形した可能性はある。

26) toch. の例; skt. *sāntaka*: toch. *saṃtke* (B) *niṣka*: niṣke (B) *mantra*: mantrā (A) *tāpsa*: tāpse (A) *bhāga*: pāke (B)~pāk (A) etc.

27) しかしこれに関しては、skt. -jñā/-jñī は toch. では単語のもつ意味とは無関係に単に音韻論上の情報から規則的に -jñā~jñe~jñī に決定されるのであって、今後 uig. 資料の中からこの uig. 例と並行する他の例が見付かるなら、上記規則体系の中に新しい規則を追加することができる。Skt. *nimittājñā*: toch. *nimittājñe* (AB) *prajñā*: prajñī (A) *saṃjñā*: saṃjñī (A).

これらの形式は何れも(4)より sogd. を仲介したものと推定できる。なお, skt. *samadhi*: uig. *samar* (~*samadi* < *toch.*) sogd. *s'm'r* は(5)に該当するが, 2.2.2.2 3° より sogd. を仲介した形式と推定せねばならない。

#### 1.4.1.5 R<sub>5</sub> [skt.-in: uig.-i] に従わない uig. 形式

skt.-in: uig.-#; *anāgāmin*: *anagam cakravartin*: *ċakravart sakṛdāgāmin*: *sakardagam*. *toch.* *anagam(A) cakravārt (B~cakravarti A)* *sogd.* *ċkkrβrt* それ故 uig. *anagam* は(2)より *toch.* 仲介, *ċakravart* は(3)よりやはり *toch.* を仲介した形式と推定できるが, *sakardagam* は(5)より導入経路はわからない。

1.4.1.6 R<sub>1</sub>(a), R<sub>2</sub>(a) (b), R<sub>3</sub> では uig. は規則的に -i か -# 形式をとったが, これに逆ってかなり多数の単語が -a 形式で現われる。sogd. にもこの形式は若干みられるが, *toch.* にも特に A において -a 形式例が現われる; *trṣṇā*: *trṣṇa prathama*: *prathama mahāsama*: *mahāsama āyurveda*: *āyurveda* etc. それ故, たとえば skt. *yoga*: uig. *yoga* *toch.* *yoga (A)* *sogd.* *ywk* のごとき単語は(1)より *toch.* 形式の反映と推定することも可能である。しかし, ウイグル語文献におけるこの -a 形式は出典及び単語の性格に応じた若干の偏向を示している。出典に関しては第 1 に文献の構成面での偏向がみられる。TVIII は skt. と uig. の 2 言語使用によって書かれた文献であって, その中に現われる -a 形式は skt. の直接の反映と推定できる; skt. *lava*: uig. *lava amṛta*: *amṛta turya*: *turya samāpta*: *samāpta*. 第 2 には文献が作成された時代的偏向が考えられる。-a 形式による仏教用語は BM<sub>1</sub> BM<sub>2</sub> TVII などのいわゆる後期ウイグル語仏典中に集中的に現われる。この時代は元朝であって, ウイグルは蒙古と同一仏教圏を構成していたと考えられる。蒙古仏典は一般にはチベット語原典から翻訳さ

れたにも拘わらず ind. 来源の仏教用語に関しては uig. と skt. の反映形式を使用する機会が多かった。uig. におけるこの -a 形式は mong. と同様の方法によって skt. から直接借用された可能性が強いといえる。しかしこの形式をとる語彙の中には若干ではあるが mong. の音韻特徴を反映しているとみられる単語が含まれているので (cf. 註49), あるいはこの形式が skt. との間に mong. を仲介した可能性も又考えられる。ここではその何れとも決定し難いので, 一応これをサンスクリットの言語形式 skt' から導入された形式と考えたい。だが, このような -a 形式は普通は *toch.* 仲介による形式の変種として後代になって現われたものであって, 定着形式ではない; skt. *saṃvara*: uig. *sanbara (BM<sub>1</sub>)*: mong. *sambara (MD)* cf. uig. *sanvar* < *toch.* *saṃvar (A)*, skt. *mudrā*: uig. *mudra (BM<sub>1</sub>)*: mong. *mudra (MD)* cf. uig. *mudur* < *toch.*, skt. *maṅgala*: uig. *maṅgala (BM<sub>1</sub>)* cf. uig. *maṅgal* < *toch.* *maṅkal (A)~maṅkāl (B)*, skt. *paramārtha*: uig. *paramarta (BM<sub>2</sub>)* cf. uig. *paramart* < *toch.*, skt. *ratnacandra*: uig. *ratnacantira (BM<sub>2</sub>)* cf. uig. *ratnacadri (UI)* < *toch.*—*candre (AB)*.

-a 形式語彙の若干は特定の文献中で, ある種の名称に限って現われる。HIII においては植物名を表す次の単語にこの形式がみられる; skt. *vāṭa*: uig. *vada*, *virṇa*: *virana*, *viṣadā*: *vsada*, *āmra*: *amra kakkola*: *kakula*. 又, TVII では次のごとき星座名がこの形式をとるが, これらは skt' の反映形式と考えたい; skt. *siṃha*: uig. *sinxa*: mong. *siṅqqa (MD)*, skt. *kanya*: uig. *knya*: mong. *ganiya (MD)*, skt. *mina*: uig. *mina*: mong. *mina (MD)*, skt. *āditya*: uig. *aditya*: mong. *aditya*, skt. *makara*: uig. *makara*: mong. *magara (MD)* cf. uig. *matar* < *toch.*, skt. *kuśala*: uig. *kuśala* cf. uig. *kuśal* < *toch.* *kuśal (AB)* etc.

#### 1.4.2 1.4.1.1 末の 3) のタイプについて

若干の場合、表面上 *uig.* 形式は規則に従った正常な形式を呈しているのに、逆に *toch.* が異常形式を示すことがある。この現象の生じた原因としては次の2つが考えられる。先ず *uig.* 形式が *toch.* > *uig.* の経路を経て導入されているのに、それに対応する *toch.* の形式が現存資料中に偶然見当らず、その変種の形式のみがわかっている場合、たとえば、*skt. śuddhodana*: *uig. sudodani* *toch. śud-dhodaṃ* (A), *sindhu*: *sindu* *toch. sindh*(A), *rājagṛha*: *raćakrṇ* (地名) *toch. rājagri* (A) < *sogd. r'ćkry*(Bn) などの例にみられる *uig.* -i, -u, -# は *toch.* の反映形式と推定すべき形式であり、今後別の *toch.* 資料から *uig.* と同様の対応形式の見つかる可能性は強い。

次に *toch.* は音韻論上の明確な理由のもとに不規則形式をとるが、*uig.* が *toch.* 以外のルートを経由した結果、偶然にも規則通りの形式を呈する場合、たとえば *skt. bodhisattva* 「菩薩」は *uig.* では一般に *bodistv* の形式が現われるが、これは  $R_2(a)$  に従った規則形式といえる。しかし *toch.* A では *skt.* の語幹末が -Cva のときに  $R_{(2)}$  に従って -a を欠落した場合に最終子音の -v は -u に規則的に変化するので (cf. ToGr. p. 60), この単語は常に *bodhisattu* の形式で現われる。又 B では  $R_3$  に従って常に *bodhisatve* となるので、*uig.* が *toch.* を仲介したなら、\**bodisatu* もしくは \**bodisatvi* の形式をとるはずである。一方、この単語に対応する *sogd.* 形式は *pwōystβ* であるので、おそらくこの *uig.* 形式は *sogd.* を仲介したものであろう。

1.4.3 以上語末形式の規則体系を破る形式について検討してみたが、その結果仲介言語の推定されたものあるいはその可能性の推定された *uig.* 形式は約の次のごとくである; *toch.* 仲介—*gautam anant narayan kašip maxakašip yakiš kušti ayukšani vayniki šatki vaši aviš baranas sumir anagam ćakravart prit* (cf. 1.3.6) *rakšaz* (cf. 1.3.6) *samdri*

*sogd.* 仲介—*šamir šakimun vaćrapan šravst šamar šasur bodistv maxišvar maxaruk* (1) *ratnakk.*

上掲中 ↑ 印の付けられた *sogd.* 仲介形式は、*skt.* あるいは *skt'* から導入された -a 形式と同様に、後述するごとく *uig.* 内で一時的に現われた変種と解釈できる形式である (cf. 3.1)。そして上記不規則形式中から ↑ 印の付いた単語を差し引くなら、残りの大半は *toch.* 仲介の形式となる。即ち *uig.* 内に定着した不規則的な語末形式も基本的には *toch.* を仲介したことがわかる。それ故、語末形式の規則体系が *toch.* 形式の反映によるものであるという 1.3.5 で出した結果にこの結果を加えるならば、既に語末形式の観点からは *ind.* 来源の *uig.* 語彙は基本的には *toch.* を仲介して導入されたと決定することができる。

## 2. 音韻形態上の考察

2.0 1. においては語末形式の観点から *uig.* の *ind.* 来源語彙が基本的には *toch.* を仲介して導入されたという結果を得ることができた。しかしこれは、単に語末の形式に着目することによってのみ得られた結果であって、語末がいくら規則的形式を示していてもそれ以外の部分の相違から *toch.* と一致させることのできない単語も存在するので、*toch.* が (基本的) 仲介言語であったという仮説が証明されるためには、更に語末形式以外の部分についての音韻形態上の考察が心要である。

ただし、基本形からみて変形していないと目される *uig.* 単語形式については、1. における語末形式に関する個々の単語の対比検討の過程でそれらがほんの若干の例外 (cf. 註 54) を除いては一般に *toch.* 形式と異なるものではないということが既に明らかであったので、ここでは特にこのような正常形式についての項目の設定は省略したい。それ故、以下で問題となるのは、専ら基本形からみて変形している *uig.* 形式である。



変形語彙の多くは既にこれまでも *skt.* との間に第 3 言語の仲介したという推定がなされてきたが、このような推定は各々の *uig.* 仏典の翻訳研究に際してその都度 *uig.* 形式と類似した対応単語形式として他言語中から引き合わされたものであり、変形語彙全体についての総合的考察はなされていない。ここでは単純に類似単語の対比を示すだけではなく、音韻体系、文字体系の相違に関連した変形の定義、変形の性質、変形単語の対比のタイプ等について若干の検討を加えながら、変形形式の由来について考察し、その結果が 1. の結果と如何なる関係を示すものかについて考えてみたい。

## 2.1 *skt.*, 仲介言語, *uig.* 間における一般的音対応について

基本形である *skt.* と *uig.* は文字体系及び音韻体系において全く異質の言語である。それ故 *uig.* 形式が *skt.* からみて音韻上変形しているといえるのは両言語間に設定された一般的音対応の法則を逸脱した対応を示す場合に限られる。そしてこれと同じことは仲介言語と *skt.* あるいは *uig.* との間においてもいえることである。従ってここではこの 3 者間の音対応にみられる法則性について先ず検討してみたい。

### 2.1.1 サンスクリット音とウイグル語音の対応について

一般にデーヴァ・ナーガリーを表記文字とする *skt.* に対して、*uig.* はウイグル文字、ソグド文字、マニ文字、ブラーフミー文字、チベット文字など数種類の表記文字を使用する言語である。しかしウイグル仏典の殆んどはウイグル文字によって書かれているといえるので、ここでは特に必要と認められる場合を除いては専らウイグル文字を対象としたい。但しブラーフミー文字に関しては 3.1 で

若干触れることになる。

#### 2.1.1.1 子音

*skt.* と *uig.* との音対応において最大の特徴といえるのは、有声音対無声音の対立、出気音、反舌音の 3 点に関してである。

1° *uig.* には両唇閉鎖音、p-b、歯茎閉鎖音 t-d、軟口蓋閉鎖音 k-g の音韻論上の対立は存在するが、t-d 以外の 2 組の対立には表記上の区別はなく、何れも同一文字 b, g を使用する。更に t-d の表記上の区別も厳密とはいえず、本来的 *uig.* 表記においてさえ両文字の混用はみられるので<sup>28)</sup>、ここでは一応この 3 種の対立に関しては特に音韻論的対立を考慮しない立場をとりたい。

一方、*skt.* の硬口蓋破擦音 c に対する有声音の j は本来的 *uig.* には存在しないので、普通は c を表示する場合と同じく文字 ʿ を用いるが、若干の場合には文字 z に 2 点を付した文字 ž で j を示すこともある。しかし文字 ʿ で表記されたものが有声音をも表示したか否かは明白でない; *vajra: vaćir* (一般的) ~ *važir* (UII UIII)。ここでは文字 ʿ は /ʿ/ を又文字 ž はその有声音 /ž/ を表示したものと考えたい。

2° 出気音は *uig.* には存在しないのでこれに属する *skt.* は *skt. kh: uig. k gh: g ch: ʿ th: t dh: d ph: b* のごとく *uig.* では同種の無気音に統合される; *viśākhā: viśaka dhyāna: diyan.*

3° 反舌音も *uig.* には存在しない。*skt.* の ṭ 及び ṭh は *uig.* の t に、ṇ は歯茎鼻音 n と同じく *uig.* の n に、ṣ は硬口蓋摩擦音 ś と同じく *uig.* の ś にそれぞれ統合される; *aṭavika: atavaki kṣaṇa: kśan.* しかし ḍ (及び ḍh?) は文字 d より t で表記される場合の多いのは、この *skt.* 音が *uig.* の t 音に統合される傾向にあったことを示すものといえるかも知れない; *caṇḍana: ćintan ḍākinī:*

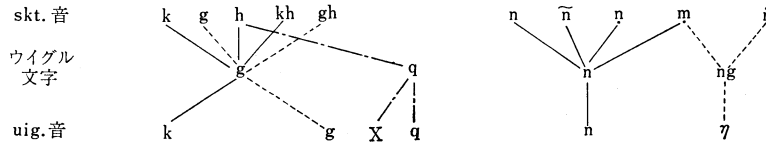
28) 特に後期ウイグル語では /t/ を文字 d で表記する例が往々みられる; *id /it/*「犬」, *ed /et/*「肉」(BM<sub>1</sub>)。

takini. なお反舌音の半母音である *r* は *uig.* 顫動音 *r* で表示される。

4° *skt.* *h* は *uig.* では軟口蓋(口蓋垂?)摩擦音の *x* あるいは語末では口蓋垂閉鎖音 *q* で表示されるが、*i* の前では口蓋化されて *k* になるのが普通である; *rahu: raxu rājagrha: račakrq lohitaketu: lokitakitu.*

5° *skt.*  $C_1-C_2$  あるいは  $C_1-C_2h$  の連続において  $C_1=C_2$  の場合に *uig.* では  $C_1$  に対応する単音でこの音連続を表示する; *bodhicitta: bodiicit bhallika: balike (TVIII) licchavi: licavi siddhi: sidi.*

6° *skt.* の *jñ* の子音連続は語頭においては



### 2.1.1.2 母音

1° *skt.* の長母音  $\bar{a}$   $\bar{i}$   $\bar{u}$  は *uig.* では一般に短母音 *a* *i* *u* で表示される; *ākaśa: akaś avīci: aviś.* 又, *skt.* の  $\bar{r}$  は *ar/ri~ra/ri* で表示される; *hr̥daya: xartay ṛgveda: ritvid ṛṣi: irśi~arśi.*

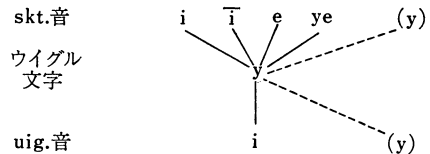
2° *skt.* の2重母音 *e* は *uig.* *i* に統合される; *jetavana: citavan pretā: prit. skt. o* は *o* あるいは *u* (第2音節以下) で表示される。*skt. ai* はウイグル文字 'y' と表記されるが, *uig.* 本来の音節構造に従えばこれを *ay* のごとく [母音+子音] 構造であったと解釈すべきかも知れない。しかし同じ2重母音の *skt. au* が一般には文字 'v' ではなく 'u' と表記されることを考慮に入れて, ここではむしろ *ai* と2重母音解釈しておきたい。

3° 又, *skt. ye* の連続は *uig.* では単母音 *i* に統合される; *pratyekabuddha: pratikabut jyeṣṭha: čist.*

4° *uig.* 音 *i* は第1音節以外では母音調和に従って一般に後舌音化することが /*śakimuni-*

*in-* 語中においては *-ty-* で表示される; *jnānaprabha: inanaprbi prajñādeva: prtyadivi.* 7° その他, *skt.* の半母音 *y* *l* *v* 及び両唇閉鎖鼻音 *m* はそれぞれ *uig.* 子音 *y* *l* *v* 及び *m* で表示される。なお *skt.* のいわゆる *anusvāra* の  $\bar{m}$  は *uig.* では子音 *n* で表示されるが, この後に軟口蓋閉鎖音が続くときには *n* は  $\bar{n}$  になる<sup>29)</sup>; *puramprabha: puranprabi śiṃha: sinxa samghaṭi: saṅgati.* 8° 以上, *uig.* 音の多くは複数の *skt.* 音に対応することがわかったが, この関係をたとえばウイグル文字 *g q n ṅ* を中心として考えてみれば次のごとく図示できる。

*liṛ/ (śakyamuni + uig. suffix)* のごとき例から明らかであるが, この交替は本論の目的に直接に関与するものではないので, ここではあえて *i* をもってこの2音素を代表したい。なお, この *uig. i* には多くの *skt.* 音が統合されているが, この関係を図示すれば次のごとくになる。



2.1.1.3 以上, *skt.* 音と *uig.* 音の対応について簡単に触れてみたが, 上掲の対応関係は一般的規則と考えられるものであって, これを逸脱した対応は基本形からみた *uig.* の変化形式と見做されるべきである。

### 2.1.2 トカラ語音とサンスクリット音及びウイグル語音の対応について

29) *Skt. hum: uig. xun (TV)* の形式の存在からみれば,  $\bar{m}$  の位置においても  $\bar{m}$  は一般に  $\bar{n}$  で表示されたという推定も成り立つ。

toch. はデーヴァ・ナーガリー文字と同系統に属する北西インドのブラーフミー文字を使用する言語である。この文字は中央アジアにおいては、いわゆる *buddhist hybrid sanskrit* を表記するのに使用された文字であって、本来はデーヴァ・ナーガリーと同一の体系を示す。

1° toch. は skt. と異って子音に有声音、出気音、反舌音を、母音に  $r!$  を、更に半母音に  $v$  をもたない言語であるが、借用語に関しては特別な文字によってこれらの音を表示することができる。その結果 skt. 音の全てを書き表わすことができるので、toch. と skt. 間の音対応における規則性を検索する必要は特にない。即ち skt. 音: uig. 音の全ての対関係は原則的には toch. 音: uig. 音の関係に置き換えることが可能である。それ故、ある toch. 形式が基本形に対して変形していないならば、uig. との対応に際してそれは基本形式と同一の音対応を示すことになる; skt. *viṣṇu*: toch. *viṣṇu* AB: uig. *viṣṇu*.  
2° しかし若干の toch. 変形形式には skt. に存在しない toch. 音  $w$  や  $ä$  が現われるが、この  $w$  は uig. の  $v$  に又  $ä$  は  $i$  に普通は対応する; skt. *ābhāsvara*: toch. *ābhāsvar* (A): uig. *abasvar śāriputra*: *śāriputtrā*(A): *śāriputri*.

3° なお、toch. 形式の多くは借用語に対する通常の音韻体系内で、基本形を僅かではあるが変形した形式が現われる。しかしそのような変形形式も uig. との音対応関係においては基本形のものとの区別のない場合が多い;

skt. *lakṣaṇa*: toch. *lakṣaṃ*(AB): uig. *lakṣan*  $\dot{s}:\dot{s}$   $\dot{n}:\dot{m}$   $\dot{n}$ , -a: -#: -# は  $R_2(a)$  による。

従って、uig. 形式が仲介言語 toch. の形式の反映形式であるか否かが音韻論上確認可能なものは、toch. 音の実際の変化が skt./toch. 音: uig. 音間の一般的音対応の規則を打ち破ったものでなければならない; skt. *uṣṇīṣa*:

toch. *uṣṇīr*: uig. *uṣṇīr*  $\dot{s}:\dot{r}$   $\dot{r}$ .

### 2.1.3 ソグド語音とウイグル語音及びサンスクリット音の対応について

sogd. は主にソグド文字と マニ文字を使用する言語であるが、両者とも uig. に直接導入された文字である。しかし仏典は一般にソグド文字で書かれているので、ここでは特にソグド文字文献を対象として考えてみたい。

ウイグル文字はソグド文字の *cursive* タイプとして発展してきたと考えられる文字であって、両文字間には体系上の基本的な違いはみられない。しかし、以下のごとく主として sogd. と uig. の音韻体系上の相違に起因するところの若干の差異が skt. 音対 sogd. 音及び uig. 音の対応関係中に現われる。

1° sogd. は印欧語本来の  $l$  が、 $r$  に変化した言語であって、表記文字においても後代になって uig. から導入されたといわれる、 $r$  表示の文字に *diacritic* を付けた文字  $l$  の存在を除いては一般にこの音を表記する固有の文字を所有しなかった。それ故 skt. からの借用語彙中に現われる  $l$  音は普通は文字  $r$  で表記される; skt. *kalpa*: sogd. *krp*: uig. *kalp maṇḍala*: *mntr*: *mantal laṅkā*: *rnk'*. 又、稀には *kōp*, *ḍwk* (skt. *loka* uig. *lok*)のごとく  $[ḍ][ḥ]$  の音価を表示する文字  $ḍ$  がこれにかわることもある。しかしこのような  $r$  や  $ḍ$  が  $l$  の音価を表示したか否かは今のところ明確にはされていない。

2° sogd. における有聲閉鎖音  $d$  は本来の音声ではなく、特定の環境のもとに2次的に発生したものであって、このような  $d$  は文字  $t$  で表示されるのが常である。一方 skt.  $d$  *dh* に対しては文字  $t$  [ $t, d$ ] の他に  $ḍ$  [ $ḍ, ḥ$ ] がその表記に使用される。この使い分けに法則性はみられないが、skt. *nd*, *ndh* においては普通は文字 *nt* の連続が用いられる。これは sogd. 音  $d$  が一般に  $n$  に後続して2次発生する事実と関連するものであって、この場合の文字  $t$  は [ $d$ ] を表示したものと推定でき

る<sup>30)</sup>。

3° uig. では skt. の tt, ddh は t あるいは d の単音に統合されたが, sogd. では文字連続 tt で表記されるのが普通である; skt. *pratyekabuddha*: sogd. prt'ykpwtt: uig. pratikabut. なおこれとは別に r の前に立つ閉鎖音はしばしば CC となるが, これは sogd. の特徴といえる; *sūtra*: swttr: sudur *cakravartin*: ékkrβrt: éakravart *gotra*: kwtr.

4° skt. の jñ には ény ではなく tny が対応するが, この対照は uig. の場合と若干似ている; skt. *prajñāpāramitā*: sogd. pr'tny'-p'rmyt: uig. prtya-. しかし skt. *yajñadatta*: uig. yatyadati のごとく語末形式 (R<sub>1</sub>(a)) から toch. を仲介したと推定できる uig. 形式も存在するので, この uig. の ty は sogd. 音の影響によるというよりはむしろ両言語に導入された各々の被借用言語のこの skt. 音に対する実際の発音形式が類似していた事実を示すものと考えべきである。

5° skt. he に対して uig. は一般に ki が対応したが sogd. では文字 r'y [xē], ry [xi] が対応して文字 k は現われない; skt. *maheśvara*: sogd. mɣ'yśβr: uig. makiśvr.

6° skt. ī/ū, e/o に対して uig. では i/u, i/o~u の対応を示した。sogd. でも uig. と同様に文字 y 及び w をもってこの skt. 音と対応する例がみられるが, 多くは 'y[i ē], 'w [ū ō] のごとく文字連続によってこの skt. の長母音, 2重母音を表示する; skt. *gotama*: sogd. k'wt'm': uig. gotam (kwt'm)<sup>31)</sup> *virūpākṣa*: βyr'wp'kś *sumeru*: sm'y'r: sumir (swmyr) *avīci*: "β'ycy: aviś("βyś). 一方 skt. ā には uig. 同様一般に"(語頭)'(語中)を用いるが, 時には語中位に"の使用されることもある; skt. *acārya*: sogd. "é'ry: uig. acari

("é'ry) *caṇḍala*: ént'r: candal(é'nḍ'l) *cintāmaṇi*: éynt'mny: éintamani (éynt'm'ny).

7° 語中位の skt. a は uig. と異って一般に表記されない。一方 skt. i u には普通は文字 y [i] w [u] が対応するが, 時々みられる y w の文字欠如が実際に如何なる音価を表示したのかは明らかではない。

以上に掲げたもの以外の sogd.: skt. の音対応は uig.: skt. の対応と原則的には一致している。ところで, ソグド文字とウイグル文字の類似していることから, sogd. > uig. への語彙借用に際しては文字形式による導入の存在も想定できる。しかし sogd. の長母音表記法 'y 'w が uig. に採用されていない点, あるいは skt. l 音が sogd. を仲介して r で表記された uig. 例の見当らない点を考慮するなら, 文字形式よりむしろ音形式によって uig. に借用された可能性が強いといえる。それ故たとえば skt. *maheśvara sumeru* などの単語が sogd. 形式 mɣ'yśβr [maxēśvar] sm'y'r [s<sub>ɣ</sub>mēr] を仲介して導入された場合には, \*maxiśvar \*s(ɣ)mir の形式で反映されたであろう。

## 2.2 ウイグル語形式の変形について

基本形からみた uig. 形式の変形が如何にして起ったかについては大方次の2つの理由が推定される。第1には uig. 形式が仲介言語の反映とは関係なく, uig. 内部における一般的音韻変化の一環として, あるいは仲介言語形式を導入後 uig. 本来の音韻構造に改変しようとして, 生じた uig. 独自の変形による場合である。第2には仲介言語において既に存在した変形形式がそのまま uig. に反映された場合である。

変形形式が何れの仲介言語形式を反映した

30) uig. においても n の後の有声音 d は多くの場合文字 t で表記されるが, これは恐らく sogd. の一般的表記法の伝統に従ったものであろう; Skt. *mahendra*: uig. makintri *nandisena*: nantisini *gandharva*: kantarvi. これらの単語は語末形式より何れも toch. を仲介したと推定される。

31) 括弧内は便宜的にソグド文字の転写法を用いた。

ものかを決定するためには、変形語彙中から先ずこの第1のものを選別し、残りの語彙即ち第2の中から各々の仲介言語を決定せねばならない。

### 2.2.1 ウイグル内で生じた変形形式

1° skt. #r-/#st-: uig. Vr-/Vst-

本来 uig. は語頭に流音及び子音群をもたない言語である。それ故若干の単語は初頭に母音を前接させることによって uig. 本来の構造に改変する; skt. *rūpadhātu*: uig. *uru-padatu revata*: *irivati rājāvartā*: *arzahlv stūpa*: *istup sthāvīraka*: *istaviriki*.

2° skt. CC-: uig. CVC-

語頭子音群を避けるために uig. において子音間に母音挿入の行われることもある; *kleṣa*: *kiliṣ śreṣṭhya*: *śiriṣṭi prasenajit*: *pirasanči*. 又、母音挿入は語中位の子音群に対しても行われることがある; *indranila*: *indiranil tantra*: *tantira somakṣema*: *somakiśimi sahasra*: *saxasira*.

3° skt. CrV-: uig. CVr-

語頭に CrV- の音連続が立つ場合に -rV- を -Vr- に音位転換することによって子音群を避ける例もある; *graha*: *garq pradhāna*: *ardan śrāvaka*: *śarvak triśūla*: *tirśul srotāpana*: *sortapan*.

4° skt. -VCCV<sub>1</sub>: uig. V<sub>2</sub>CV<sub>3</sub>C V<sub>1</sub>=a, ā

V<sub>3</sub>=i, u

*abhidharma*: *abidarim pātra*: *patir cakra*: *čakir vajra*: *vačir yantra*: *yantir śāstra*: *śastir sūtra*: *sudur śukra*: *śukur padma*: *patum nilapuṣpa*: *nilapuśup*. V<sub>1</sub> は語末形式規則 R<sub>2</sub> に従って脱落したものである。V<sub>1</sub> 脱落後、語末は -CC となる。uig. では音節末位の子音群は [鼻音/流音]+[口腔音] の結合を除いては一般に許されないので -CC 間に母音挿入を行って -CVC 構造に改変したものと推定できる (cf. skt. *kalpa*: uig. *kalp paramārtha*: *paramart*)<sup>32)</sup>. 但し V<sub>3</sub> の前後に両唇閉鎖音が立つか V<sub>1</sub> に円唇母音の立つ場合には V<sub>3</sub> は円唇母音となる。

5° skt. -au-: uig. -av-

skt. の *gautama kauśika kauśa-bhavana* における2重母音 -au- の u は uig. では v で表示されることもある; uig. *gavtam kavśiki kavśavan*. これは、uig. には本来2重母音 -au- が存在しないので、この特殊な VV 構造を VC 構造に改変し uig. 化したものと推定できる。

以上5種類の変形は借用形式が特に音節構造の点において uig. 化されたものであって、その役割を果たしたものは uig. の母音であった。この他に uig. 内部で起ったと推定される子音変化の例も若干みられる<sup>33)</sup>。

32) この uig. と同じような現象は *toch.* においても往々みられるが、最終子音は r か ṣ に限られているので、たとえば *abhidharma* には V 挿入は起らず *abhidharm (A)* の形式で残る (*uig. abidarim*)。それ故 uig. におけるこの現象が *toch.* の反映によるものとはいえない。skt. *pātra*: *toch. pātār (A) cakra*: *cakkār (AB) yakṣa*: *yakāṣ (A) vajra*: *vājār (A) yantra*: *yantār (A) śāstra*: *śāstār (A) sūtra*: *sūtār (AB) gotra*: *gotār (AB) rūkṣa*: *rukās (B) pratipakṣa*: *prati-pakāṣ (B)*。

又、これとよく似た現象として、uig. には次のような変形がみられる; skt.-V<sub>1</sub>CV<sub>2</sub>CV<sub>3</sub>: uig. -V<sub>2</sub>CV<sub>3</sub>C# 但し V<sub>3</sub>=a V<sub>4</sub>=i/u, *gandhamādāna*: *gantamadin kuśinagara*: *kuśinagir mahāmandārāk*: *maxamandarik mahāśrāvaka*: *maxaśravik yogaśataka*: *yogaśatik jātaka*: *čatik śrāvaka*: *śravik śāsana*: *šazin karmaṣaṭha*: *karmaput*. V<sub>3</sub> の脱落は R<sub>2</sub> によるものである。V<sub>2</sub>>V<sub>4</sub> の変化の原因はよくわからないが、V<sub>1</sub> に長母音の立つ場合の目立つことから被借用言語において V<sub>2</sub> が曖昧音であってそれを uig. が i あるいは u (両唇音の後) で表示したという推定も成り立つ。なおこれに並行する *toch.* として *tricivara*: *trīcivār (B)* がみられる。

33) uig. 内部で起った変化例として次の2つを掲げたい。  
skt. -ya-; uig. -i-

## 2.2.2 仲介言語形式の反映による変形形式

変形が何れの言語形式の反映であるかを決定することは容易ではない。詰まるところこの決定は *uig.* 形式に対応する同一変形形式が特定言語中に見付かった場合にのみ十分な可能性をもちうる。しかし若干のそのようでない変形も一定の条件を満足することによって仲介言語をある程度まで推定することは可能である。

変形形式は *uig.* と仲介言語と仮定した *toch.* 及び *sogd.* との間に次のような対応のタイプを示す。

- (a)  $uig. = \begin{bmatrix} \text{toch.} \\ \text{sogd.} \end{bmatrix} \neq \begin{bmatrix} \text{sogd.} \\ \text{toch.} \end{bmatrix}$
- (b)  $uig. = \begin{bmatrix} \text{toch.} \\ \text{sogd.} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \text{sogd.} \\ \text{toch.} \end{bmatrix} = \#$
- (c)  $uig. \begin{bmatrix} \text{toch.} \\ \text{sogd.} \end{bmatrix} = \#$
- (d)  $uig. = \text{toch.} = \text{sogd.}$
- (e)  $uig. \neq \begin{Bmatrix} (\text{toch.}) \\ (\text{sogd.}) \end{Bmatrix}$

skt. の *-ya-* は普通は *uig.* でも *-ya-* として現われる; *anīyatā: anīyat sūryadatta: surya-dati.* しかし skt. *kāśyapa* を語幹構成要素にもつ人名表示の単語は *uig.* では *kašip~kāśyape* (TVIII)~*kaśyapi maxakašip~maxakašapi* (skt. *mahākāśyapa*) *gayakašapi* (*gayākāśyapa*)のごとく語末が *-#* のときは *-ya-* は *-i-* に、*-i* のときは *-ya-* 又は *-a-* になる。これらの単語に該当する *toch.* 形式は *kāśyap* (AB), *mahākāśyap* (A)~*mahākāśyape* (B) のように語末は、*-#*, *-e* に分かれるものの *-ya-* が *-i-* に変化することはない。一方, *sogd.* では *k'š'yp* [*kāšip~kāšēp*] の形式がみられるが、この音形式は語末が *-#* の *uig.* 形式と一致するものといえる。それ故 *uig.* 形式は語末が *-i* の場合には *toch.* を、*-#* の場合には *sogd.* を仲介して導入された形式であるという推定も一応は成り立つ。しかし, skt. *-ya-* が *uig.* *-i-* に変化する例として他に skt. *śākyamuni: uig. śākimuni* を掲げることができる。この単語の *sogd.* 形式は *š'kymwn* [*śākimun*] であって *-ya->-i-* の変化は *kāśyapa* の場合と同じく *uig.* と一致するが、語末形式規則 *R<sub>4</sub>* [skt. *-i:uig. -i*] を考慮するなら、この *-#* 形式をとる *sogd.* の反映形式として *uig. śākimuni* の現われる道理がない。それ故この *uig.* 単語は *sogd.* ではなく *toch.* の *śākyamuni* (AB) を仲介した形式であって、この *-ya->-i-* の変化は *uig.* 内部で生じたものと推定すべきである。このことから *kāśyapa* を語幹構成要素にもつ *uig.* *-#* 形式単語も *-ya->-i-* の変化は *uig.* で生じたものであって、これらの単語は 1.411. で推定したごとく *toch.* を仲介した形式であると考えた方がよい。なお、*-ya->-a-* の変化も恐らく *uig.* 内部で起ったものであろう。

skt. *s: uig. z*

*naivasika: naivaziki śānavāsa: śānavazi śāsana: śāzin saṃghahāsa: saṃgdiz.* 最初の例は神格名を表わしていて *R<sub>1</sub>(a)* に従うので *toch.* を仲介したと推定できる。 *saṃgdiz* の変種として *saṃdas* がみられるが、他の2例と同様、*s* の有声化は *i* に前後して生じたと推定できる。これが如何なる理由のもとに生じたのかはわからないが、恐らく *uig.* へ導入される際あるいは導入後に起った変化であろう。cf. *sogd. n'yβ'syk, ś'sn.* なお, Skt. *rākṣasa: uig. rakšaz* における *s>z* は *toch. rakšats*(A) を反映したものと推定できる。

- 34) *toch.* の並行例; *śacī: śāśi ācārya: āśri* (A)~*āšari* (B). *ācārya* に当たる *uig.* は *ačari* であるが、この形式は *sogd. 'c'ry* より借用されたと推定してよからう。

上掲5種類のタイプの内 (a) を除いては次の2つの条件が関与することによって仲介言語の決定あるいは推定がなされうる。

- (1) 語末形式規則 *R<sub>1</sub>(a)* 及び *R<sub>3</sub>*
- (2) 特定言語における変形の並行性

以下、上掲対応タイプの順に従って検討して行きたい。

2.2.2.1 (a)  $uig. = \begin{bmatrix} \text{toch.} \\ \text{sogd.} \end{bmatrix} \neq \begin{bmatrix} \text{sogd.} \\ \text{toch.} \end{bmatrix}$ 

*uig.* に対応する単語は *toch. sogd.* の両言語にみられるが、その内の一方のみが *uig.* 形式と一致するタイプにおいては、この対応関係以外に仲介言語決定にとっての関与的情報の存在しない限りにおいて、*uig.* 形式は一致形式としての *toch.* あるいは *sogd.* の反映であると決定してよい;

skt. *aviči: uig. aviš* < *toch. aviš* (AB)<sup>34)</sup> cf. *sogd. 'β'yycy 'β'yc*  
skt. *uṣṇīṣa: uig. uṣṇir* < *toch. uṣṇir* (A)  
cf. *sogd. wśn'yš*

- skt. *kaṣāya*: uig. [kzari]  
[karaza]
- < [toch. *kāṣāri*(A)]  
[sogd. \**karaza*<sup>35)</sup>] cf. toch. *kāṣār* (B)
- skt. *viḥāra*: uig. *vr̥xar* < sogd. *βr̥r'r* cf.  
toch. *wyār*(A)
- skt. *śikṣāpada*: uig. *éaqṣaput*<sup>36)</sup> < m. sogd.  
*éxś'pt* (Ger.) cf. toch. *śikṣāpat*(A) ~ *śikṣa-*  
*pāt*(B) b. sogd. *śks'pt*(R)
- skt. *saṃsāra*: uig. *saṃsar* < sogd. *snks'r*  
(Bn) cf. toch. *saṃsār*(A)
- skt. *arhant*: uig. *rxant* < sogd. *r̥r'nt* cf.  
toch. *ārant*(A) ~ *arhante*(B)
- skt. *kiṃnara*: uig. *knt(i)r*<sup>37)</sup> < sogd. *kynntr*  
(Bn) cf. toch. *kinnare*(AB)
- skt. *upāsaka*: uig. *upasi* < sogd. *wp'sy*<sup>38)</sup>  
(Ger) cf. toch. *wāsak*(A) ~ *upāsake*(B)
- skt. *upāsikā*: uig. *upasané* < sogd. *wp's'nch*  
(Ger) cf. toch. *wāskāñé*(A) *upāsakāñca*(B)

### 2.2.2.2 (b) uig. = $\left[ \begin{array}{c} \text{toch.} \\ \text{[toch.]} \end{array} \right] \left[ \begin{array}{c} \text{sogd.} \\ \text{[sogd.]} \end{array} \right] = \#$

# で示された言語中にも uig. 同様の變形形式の存在した可能性はもちろん考えられる。

1° 變形部分と同じ音韻、形態上の變化が

# の言語において一般的現象として並行する場合にはその言語内にも又同様の變形單語形式が存在した可能性は強い;

skt. *śramanā*: uig. *ś(i)mnané*: sogd. *śmn'né*  
toch = #

この対応における變形部分は *-r->#-*, *-ā>-ané* の2箇所であるが、何れの変化も toch. に並行例がみられるので、同様の變形單語が toch. 内にも存在した可能性は強い。従って上掲の対応関係のみから uig. 形式が sogd. の反映であると決定することはできない。

2° 語末形式規則 R<sub>1</sub>(a) に現われる uig. *-i* は toch. 形式を反映した特徴的語末形式であったが、この *-i* をもつ次のような單語は toch. を仲介したものであり、變形自身もその反映形式であると決定できる;

skt. *krakucchanda*: uig. *krkaśunti* (仏名)  
< toch. *krakasundi* (AB) *-u·cch·a->-a·s·u->-a·s·u·*.

3° 語末は R<sub>1</sub>(a) (又は R<sub>3</sub>) に属さないが、# で示された言語中に uig. と同じ變形の並行例をもたない單語、あるいは變形部分が複数の音韻変化によって形成された特殊な uig. 單語形式は # の言語中に同様の變形單語の存

35) Sogd. \**karaza* は ETS (p. 357) の sogd. *karazakh* から引用したが、*-kh* は sogd. 接尾辞と考えた (cf. Ger. 971).

なお、この uig. 單語はここでは「袈裟」を意味するのであって、同じ skt. 形式のもつ「濁」に対しては本来の uig. に翻訳した *čöpdik* を使用するのが普通である。

36) uig. 形式の變形は skt. *ś>uig. é* だけではなく *k>q* の点においても m. sogd. と一致している (cf. 2.1.1.1 6°).

37) この uig. 形式は知りうる限りでは uig. 文献の2つの箇所に現われる。1つは「添品妙法蓮華經」中の次の文中にみられる;

*birök tngirilär yäklär lu-lar kntr-lär asurlar talin qra xus-lar maxaruklar kišili kiši ärmäz-li ...* (UII p. 20). Müller はこの *kntr* に乾闥婆を該当させているが、このウイグル文は漢訳本の「天竜夜叉乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人…」(Müller の傍注漢文による) に相当するものであって、漢文と較べてみればウイグル文には乾闥婆か緊那羅の何れか一方が欠けていることになる。一方、*kntr* はもう1箇所「天地八陽神呪經」にも現われる;

*yäklär uluq küelüg luular kntir-lär asur-lar talim qraxus qanlarī kántärvi-lär* (SY p. 205). 羽田博士はこのウイグル文の *kntir* と *kántärvi* (gantarvi) の両方に乾闥婆の訳語を付けられたが、これはむしろ上の Müller のものに従われたのであって、漢文では「夜叉乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊那羅」となっていて緊那羅が現われるので、この uig. 形式 *kntir* は Müller のものも含めて緊那羅に当てるべき性格の單語と推定される。なお、緊那羅には普通は *kinari* の形式が用いられる。

38) Sogd. 並行例; skt. *virūdhaka*: sogd. *βyr'wr'y* (Bn) cf. uig. *virudaki* < toch.

在した可能性は極めて薄いといえるので、ここではこれらの uig. 形式が等号で結ばれた言語からの反映形式であると推定したい。

skt. *makara*: uig. *matar* < toch. *matar* (A B)  $k > t > t$

skt. *kūtāgāra*: uig. *kurikar* < toch. *kurekār* (AB)  $ṭ \cdot \tilde{a} > r \cdot e > r \cdot i$

skt. *sphaṭika*: uig. *sparir* < toch. *spharir* (B)  $ṭ \cdot k > r \cdot r > r \cdot r$

skt. *svayaṃvara*: uig. *svayambar*<sup>39)</sup> < toch. *svayampa*(rA)  $m \cdot v > m \cdot p > m \cdot b(p?)$

skt. *samādhi*: uig. *samar* < sogd. *s'm'r dh* > r > r cf. 1.4.1.4.

skt. *halāhala*: uig. *anaxal* < toch. *anahāl* (A)  $h \cdot l > \# \cdot n > \# \cdot n$

skt. *ānantarya*: uig. *anantraš* < toch. *anantārs*<sup>40)</sup> (B)  $y > \xi > \xi$

skt. *piṇḍapata*: uig. *pinvat* < toch. *pinwāt* (A)  $ḍ \cdot a \cdot p > \# \cdot \# \cdot w > \# \cdot \# \cdot v$

skt. *ajāgara*: uig. *ačakram* < toch. *aca-karm*<sup>41)</sup> (B)  $\# > \cdot m > \cdot m$

skt. *trayastrīṣa*: uig. *strayastrīs* < toch. *strāyastriṅś* (A)  $\# \cdot > s \cdot > s \cdot$

### 2.2.2.3 (c) uig. $\left\{ \begin{array}{l} \text{toch} \\ \text{sogd} \end{array} \right\} = \#$

このタイプの対応においては、uig. に対応

する単語は toch. sogd. の何れにも見付かっていない。

1° 語末形式が  $R_1(a)$  に従っている単語は toch. を仲介して導入されたと判断できるが、この場合、変形自身は uig. 内部においても又起りうる。しかし次のような変形は toch. 中に同様の並行例がみられるので一応 toch. 形式の反映であると推定したい。

skt. *upakāla*: uig. *upakati* (鬼名)  $\left. \begin{array}{l} \\ \\ \end{array} \right\} < \text{toch.}$

skt. *mahākāla*: uig. *maxakadi* (神名)  $\left. \begin{array}{l} \\ \\ \end{array} \right\} (1 > t/d)$

sk. *hiḍimba*: uig. *kilimbi* (鬼名  $d > l$ )<sup>42)</sup> < toch.

skt. *bhīmasena*: uig. *bimbasi*(人名  $m > mb$ )<sup>43)</sup> < toch.

2° 語末形式が  $R_1(a)$  に属さない単語においては変形がどの言語の形式を反映したのかという明確な推定は困難であるが変形部分の変化が特定の一言語中に並行して現われる場合にはその言語の形式を反映した可能性は推定されうる<sup>45)</sup>;

skt. *jaṭa*: uig. *čar* ( $ṭ > r$ ) <? toch. cf. skt. *cakravāḍa*: toch. *cakravār*(A) *koṭi*: kor(A) *kavaḍa*: kāpār(A)<sup>46)</sup>

skt. *ṛgveda*: uig. *ritivid* ( $g > t$ ) <? toch. cf. 2.2.2.2 3° skt. *makara*: toch. *matar*

39) uig. におけるこの変形の並行例は *anavatapta*: *anubadat hilišavati*: *xulšubati kañcanavati*: *kañcanabati* のごとく何れも母音間で  $v > b$  に変化した形式がみられる。toch. でも元来  $v$  音は存在しないので *kavada*: *kāpār*(A) *avici*: *apiš*(B) のごとくしばしば  $v$  は  $p$  に変化する。それ故このような uig. 変形式が toch. を反映した可能性はある。

40) toch. 並行例; skt. *ārya*: toch. *ārši* (A) ~ *ārše* (B).

41) Hansen はこの単語を sogd.  $*'č'kr'm$  と結びつけているが、(Hn p. 142), uig. の *-kram* は toch. から導入後 *-karm* の  $-VCC\#$  を  $-CVC\#$  に uig. 構造化した形式と考えられる。なお、これによく似た変形として uig. には *mantra*: *maṃtrṃ* (TVIII) がみられるが、上掲の形式と並行した性質の変形か否かはわからない。

42) uig. 並行例; skt. *pīppali*: uig. *pitpidi kālasūtra*: *katasudur*. toch. 並行例; *kālika*: *kāḍike* (A). uig. 変形が toch. 形式の反映である可能性は考えられる。

43) toch. 並行例; *grdharakūta*: *grddharkūl* (B).

44) toch. 並行例; *āmra*: *āmpar* (A).

45) 並行例をもたない次のような変形式に関しては仲介言語の推定はむづかしい; skt. *diśasauvastiika*: uig. *tiśastvustik* (Tiś) *sūḱmāilā*: *suksumur* (HI, TVII) *śrṅgavera*: *sakabir* (HII) etc.

46) Sogd. にも反舌音が  $r$  に変形した例はみられるが、 $-čV > -r\#$  になる例は見当たらない; *ḍomba*: *mp virūḍhaka*: *βyr'wr'y*.



## (AB)

skt. *śramaṇerikā*: uig. *śrimiranć* (-kā > -anć)

女性表示の接尾辞 -anć が toch. sogd. の両言語に存在することについては先に述べたが (cf. 2.2.2.2 1°), この uig. 形式のように skt. -kā を脱落させて -anć を付加するのは一般に sogd. で見られる現象と考えられるので<sup>47)</sup>, この uig. 形式はむしろ sogd. の反映である可能性が強い。

## 2.2.2.4 (d) uig. = toch. = sogd.

uig. 単語と同一変形形式が toch. sogd. の両言語中に認められる場合に、仲介言語としてその一方を選択できるのは、これらの単語形式以外の何れかの情報が外部に見つかった場合に限られる。従って、次のような対応例に関しては仲介言語の推定は不可能である；

skt. *brāhmaṇa*: uig. *braman*: toch. *prā-mam*<sup>48)</sup> (A): sogd. *pr'mn*. cf. toch. *brāhmaṇe* (B)

2.2.2.5 (e) uig. ≠  $\left\{ \begin{array}{l} \text{(toch.)} \\ \text{(sogd.)} \end{array} \right\}$ 

toch. sogd. の両方あるいは片方に uig. と対応する単語は存在するものの、形式上の一一致はみられないという対応のタイプである。1° ( ) 内が何れも # でない場合には、uig. 形式が toch. sogd. 以外の言語形式から借用

されたという想定が先ず成り立つ；

skt. *bodhisattva*: uig. *pusar*: toch. *bodhisattu*(A) ~ *bodhisattve*(B): sogd. *pwtystβ*

この uig. 形式は常に *kuanśi-im-pusar* 「観世音菩薩」として現われるが、*pusar* は chin. \**b'uo-sât* 菩薩を反映した形式である<sup>49)</sup> (At-Gr p. 325)。

2° uig. 形式は仲介言語中の通常の借用形式 (単数語幹) との対応においては一致しないが、多少特異と思われる形式中から一致形式の見付かる場合がみられる；

*bodhisattva* に該当する uig. 形式は一般には sogd. *pwtystβ* を仲介した *bodistv* を用いるが、往々にして *bodisvt* の形式も現われる。この形式は *bodistv* の -tv の音位転換を起した形式と考えられがちであるが、稀にみられる *bodisv*<sup>50)</sup> の形式を考慮するなら、*bodisvt* の -sv(-) の結合は離し難い。一方 sogd. には *pwtystβ* 以外に若干ではあるが *pwtysβty* (R p. 5, 8) の形式もみられる。この形式の最後の -ty は複数の斜格語尾と考えられるから (Ger. 1228), 語幹は \**pwtysβ* であり、その複数主格は \**pwtysβt* であったと推定できる。それ故 uig. 形式はこれら2つの sogd. 形式から反映されたものと判断して間違いなからう。

3° toch. か sogd. の仲介を経たという推定は成り立つがその何れを仲介したのか、ある

47) Skt. *upāsikā*: sogd. *wp's'nch* toch. *wāskāñć* (A) skt. *kanyakā*: toch. *kānikāñć*.

48) uig. 並行例; *brahmā*: *brama*. 但し、語末は R<sub>1</sub>(b) に従っている。

49) toch. sogd. の何れか一方が # の場合にも次のような uig. 形式は別の言語形式を反映している; Skt. *amitābha*: uig. *abita*: sogd. 'myt' toch. = # この uig. 形式は chin. 'â ,mjiç ,d'â 阿弥陀から借用した可能性が強い。Cf. uig. *bai* < chin. *muâi* 昧。

Skt. *saṃvara*: uig. *sanbara* (BM<sub>1</sub>): toch. *saṃvar* (A) sogd. = # この uig. 形式は mong. *sanbara* から借用されたと推定できる (語末は skt. 形式)。なお uig. には *ratna-sambhava*: *ratnasambau-a* のごとく skt. *v* が *u* で表示される例が元朝時代の文献にはよく現われるが、この現象も mong. の影響によるものと推定できる; skt. *uruvilvā*: mong. *urbilu-a* (P<sub>1</sub>) *śrīdeva*: *siridiu-a* (P<sub>1</sub>).

Skt. *buddha*: uig. *burxan*: sogd. *pwt* toch. = #

この uig. 形式は At Gr. (p. 305) によると仏 \**b'juət+xan* (uig. 汗) であるという。

50) この uig. 形式は次のマニ教典に現われる; Von Le Coq "Ein christliches und manichäisches Manuskriptfragment in türkischer Sprache aus Turfan (Chinesisch-Turkistan)" SPAW 1909 pp. 1208-1218.

いはその一方を選択できても実際に *uig.* 形式に致った過程の、明確にできない形式がある。

*skt. arhant* に該当する *uig.* 形式は *toch. sogd.* と次のような対応関係を示す。

<i>skt.</i>	<i>uig.</i>	<i>toch. A</i>	<i>toch. B</i>	<i>sogd.</i>
<i>arhant</i>	<i>arxant</i>	<i>ārant</i>	<i>arhante</i>	<i>ry'nt</i>
<i>arhant</i>	<i>arxantané</i>	<i>ārantañic</i>	?	<i>*ry'nt'né</i>

*uig. arxant* は外見上は *skt.* の形式に一致するが、借用前に同形式から派生した *arxantané* が非 *skt.* の形式を示すところから、*arxant* も *toch.* あるいは *sogd.* の仲介を経て導入された疑いが濃いけれども、どちらの形式にも一致していない。もしこれらの *uig.* 形式が *toch.* を仲介したと仮定するなら、A と B の中間形式 *\*arhant \*arhantañic* が *toch.* に存在したことになるし、又 *sogd.* を仲介した場合には *ry'nt \*ry'nt'né* の初頭の流音を避けるため *uig.* 内で *a-* を前接した結果 *uig.* 形式が生じたと推定せねばならない。しかしこの何れとも決定し難い。

*skt. tuṣita*: *uig. tužit*: *toch. tuṣit(A)* *skt. vaibhāṣika*: *uig. vaibažiki*: *toch. vaibhāṣik*  
*skt. kuśala*: *uig. kužal*: *toch. kuśal* *skt. triśūla*: *uig. tržul*: *toch. trišul(A)*.

上掲例は *skt.* の *ṣ ṣ* が *uig.* では有声音の *ž* で表示された例である<sup>51)</sup>。*uig.* には本来齒茎硬口蓋有声摩擦音の *z* は存在しないので、この音が他の言語形式の反映であることは明白である。O. Hansen はこのような *uig.* の *ž* は *sak.* の *ṣ* あるいは *ś* (何れも有声音表示) を反映するものであり、上掲例のごとき *uig.* 単語形式は全て *sak.* よりの借用であると述べたが (Hn p. 149)、実際にこ

れらの *uig.* 単語に対応する *sak.* 形式は *vaibažiki*: *vibhāṣo tužit*: *ttuṣāta* のごとく約そ *uig.* 形式の原形とは考えられない程大きな相違を示している。一方 *vaibažiki* の語末形式は *toch. A* とは一致していないが、この単語は「毘婆尸論師」の意味を表わすもので、語末形式規則  $R_3$  に該当している故、*toch.* を仲介したと推定できる<sup>52)</sup>。曾て Bailey が論じたごとく *toch.* における文字 *ṣ ṣ* が借用前の単語形式の有声をも表示したという説に従うなら (B p. 145)、これらの *uig. ž* が *toch.* 音形式の反映によって生じたという推定も可能となる<sup>53)</sup>。

3.2 以上、音韻形態面において変形した *uig.* 形式が如何なる言語の影響によるものかについて検討してみた。その結果、変形には仲介言語とは直接の関係をもたない *uig.* 内部で起った変形と仲介言語形式の直接の反映によって生じた変形の存在することがわかった。しかし後者において仲介言語決定は簡単ではなく、明確に決定あるいは推定できるものは原則的には (a) 及び (b) のタイプに限られた。今これら明確にされた *uig.* 形式をその仲介言語の別に列挙するなら次のごとくである (但し 1.4.3 で示した形式については省略する);

*toch.* 仲介—*avis krksunti matar anaxar pinvat anantras ačakram strayastris kurikar sparir ušnir svayambar †kzari* *sogd.* 仲介—*†rxant caqšaput vraxar †saṣar †knt(i)r upasi upasané kzara †bodisvt †bodisv.*

† 印の付いた形式は後に述べるところの変種形式であって *uig.* には定着しなかった。

51) この他の *uig.* 並行例; *skt. abhiṣeka*: *uig. abžik*: *toch. abhišek (AB)* *skt. ṛṣi*: *uig. rži.*

52) この他の *uig.* 語末形式も  $R_3(a)$  に従っている。

53) 以上の他に *uig.* 変形形式として次のものを掲げることができるが、特に *skt. koṭi*: *uig. kolti*: *sogd. kwrtiy [kolti]?*~*kwty*: *toch. kor (A)*~*koṭ (B)*, *skt. puṣya*: *uig. buyan*: *sogd. pwny'n*: *toch. pñi (A)* の対応関係からは *sogd.* の仲介も考えられる。しかし次のような形態上の変形が如何なる経路を経たかは不明である; *Skt. puṣya*: *uig. puś*: *toch. puṣye(A)* *vairambha*: *vairam vṛṣabha*: *vriś maṇi*: *manir jñātiputrika*: *jñātiputri (TVIII)* *tīrthika*: *tirti locanā*: *locanta* ~*lośanta* *vairocana*: *vairocanta.*

それ故上掲単語中の定着形式はその大多数が *toch.* を反映した形式であるといつてよい。

更にこれらに 2.2.2.3 において語末形式から *toch.* 仲介と推定された若干の単語を加えると *toch.* の勢力はより強大なものとなる。

2.4 音韻, 形態論上, *uig.* *toch.* 間の一致にとって大きな妨げとなることが予想された *uig.* 定着変形式の中には若干の *sogd.* を仲介した単語も存在したが, 基本的には *toch.* を仲介したところのその反映形式として現われた。前述したごとく *uig.* の正常形式は一般に *toch.* 形式と一致しているので<sup>54)</sup>, この事実が即ち音韻, 形態上の *uig.* *toch.* の対応関係が 1. の語末形式に関して得た結果を支えるものであって, 決して 1. の結果と矛盾する性質のものではないということを意味している。

ここにおいて, *uig.* 内の *ind.* 来源語彙は基本的には, 仲介言語の 1 つと仮定された *toch.* からの直接の借用によって導入されたという事実が証明されたことになる。

そして現在, ここで扱われた変形語彙以外の *uig.* 内の語彙は一応原則的には基本形からみて変形していない形式と考えられ, その中の各単語が 1. で設立された語末形式の規則に従っている場合には, 原則的に *toch.* を仲介した形式であると決定して差し支えない。たとえば, *skt. dipaṃkara: toch. dipankare(A) uig. dipankari, skt. jetavana: toch. jetavaṃ (AB): uig. citavan, skt. asura: toch. asure(B): uig. asuri* などの対応はそれぞれ語末規則  $R_1(a)$   $R_2(a)$   $R_3$  に従ってい

るので, *skt.* 形式の代わりに *ind.* を代入するなら, *ind.*  $\rightarrow$  *toch.*  $\rightarrow$  *uig.*  $\rightarrow$  の貸借関係列に書き換えることができる。又, *skt. kāśmīra: uig. kaśmir, skt. ḍākinī: uig. takini, skt. śāstratantrin: uig. śāstratantri* などとはそれぞれ  $R_2(a)$   $R_4$   $R_6$  に従っているので *ind.*  $\rightarrow$  *toch.*  $\rightarrow$  *uig.*  $\rightarrow$  に書き換えられる。

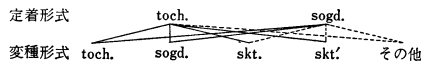
### 3. 借用語彙の定着について

#### 3.1 定着形式と変形式

*uig.* の *ind.* 来源語彙は, 基本的には *toch.* を, そして若干の *sogd.* あるいはそれ以外の言語<sup>55)</sup> を仲介言語として導入され, それら仲介言語の反映形式で定着した。0. でも述べたごとく, この定着は強固であって, 翻訳原典言語の種類に拘わらず, 原則的には同一の形式で現われる。ウイグル文献中には *TIX* や *TVIII* のように *uig.* と他言語との二言語使用によって書かれた文献もみられるが, このような文献においてさえ定着形式の使用は原則的には固守されている。たとえば *TIX* はマニ文字による *toch. B* と *uig.* で書かれたマニ教典であるが, *éxšapt, buyan* のごとく *sogd.* を仲介した定着形式が *toch.* 化されることはない。又 *TVIII* は *skt. uig.* 併用の *ブラーフミー* 文字で書かれた文献である故, *ind.* 来源の借用形式は *skt.* 形式に改変され易い立場にあるといえるが, この文献においてすら仏教用語は基本的には定着形式が使用されている; *sogd.* 仲介—*cahśāpat* ~ *cahśāpath upāse upāsānc* *toch.* 仲介—*ānandṛṣ* *ānand kāśyape māthamghi* (*skt. mātaṅga*) *śāriptri* (*skt. śāriputra*) *ṛṛpuse* (*skt. traṇuṣa*)<sup>56)</sup>。

- 54) *uig.* の正常形式に対して *toch.* が異常形式を示すものとして次の 3 例を掲げることができる; *Skt. ācārya: toch. āsari (A)~āsari (B): uig. ačari* (<*sogd.* "c'ry, *skt. ṛṣi: uig. irši~arśi: toch. riṣak (A)~rṣāke (B) skt. kailāsa: uig. kalyas* (<*kaylas*): *toch. kailāk*, しかし後ろ 2 例の *uig.* 形式の導入経路については不明である。
- 55) 定着形式として *toch. sogd.* 以外の言語形式から借用されたと考えられるものは, 註 49 で *Chin.* 仲介の可能性が推定された *abita burxan* の他に, *Skt. buddha-saṅgha* に対応する *uig. bursan* ~ *bursoṅ* も *chin. \*b'juat-səng* 仏僧から導入された可能性はある (cf. *At Gr. p. 305*). この他, 語末形式に *-a* をとるところの *skt.* の中から定着した形式の出現も予想される (cf. 1. 416)。
- 56) しかし若干の定着形式は書き手が *skt.* を意識することによって, *uig.* に存在しない音価に対し

このように定着形式は安定した存在であるが、時にはその変種が現われる。変種の多くはもちろん *toch.* 仲介の定着形式に対する他の仲介言語の反映形式であるが、定着形式として *sogd.* の立つ場合もみられる。ここで扱った定着形式と変種形式との関係については大体次のように図示できる。但し破線は存在の可能性を示す。



ところで変種の出現は一時的現象であり出典の性格と大きな関係をもつものと考えられる。*sogd.* を仲介した変種形式は先ず、MIHIII Kh などのマニ教内容の文献に現われる。一方、「天地八陽神呪経」(SY)をはじめとする特定の仏教仏典にも集中的にこの *sogd.* 仲介変種はみられる。しかし中には「Maitrisimit」のごとく明らかに *toch.* から翻訳された仏典も含まれていることから、これらの仏典中の *sogd.* 仲介変種の出現は、*uig.* への翻訳に携わった人物がソグド人あるいは *sogd.* に慣れた者であり、翻訳時に翻訳原典の言語とは関係なく自然と *sogd.* 形式が挿入された結果であると推定したい。*sogd.* 仲介変種と主な出典との関係は次のごとくである；

- (1)bodisvt (2)knt(i)r (3)asur (4)šakimun  
(5)samir (6)saṅsar (7)rxant (8)maxiśvar (9)  
rtni

て *skt.* 本来の文字を当てることもある；Skt. *nirgrantha*: *nig. nigranthi* *skt. jambudvīpa*: *uig. jambudvip*, 一般には *nigranti canbudvip*. 又, *skt. ṛṣi* を表示するのに *ṛṣi~ṛṣi~ārśi* のごとく揺れがみられるのは *uig.* の定着形式 *arśi* に *skt.* 形式の *ṛṣi* が重なって意識されたためと推定できる。

- 57) *bodistv* の変種としては更に *sogd.* を仲介した形式 *bodisv* も追加できる。  
58) *račagri* (Ma') は, *skt. rājagrha* に当る *toch.* 仲介の *račakrḡ* の変種として現われるが, *toch. sogd.* の何れを仲介したかは不明である。  
59) Skt. *makara* に当る *uig.* 形式には *toch.* 仲介の *matar* と *skt.* 仲介の *makara* (TVII) が現われるが, 前者は 'a kind of sea monster' 後者は 'name of the 10th sign of the zodiac' の意味で用いられている。*matar* が後者の意味にも用いられるなら, *makara* はその変種であるといえる。

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)
SY	+	+	+	+	+	+	+	+	+
UII <sub>3</sub>	+	+	+						+
Ma	+			+					
MIII <sub>3</sub>					+				+

以上の内(1)は *sogd.* 仲介定着形式 *bodistv* の変種である<sup>57)</sup>。(2)(3)(4)(5)(6)(8)は *toch.* 仲介定着形式 *kinari asuri šakimuni sumir sansar makiśvari* の変種である。(7)(9)は不明定着形式 *arxant, ārdini* の変種である。なお, (4)の *šakimun* は上掲文献以外にもマニ教典である MI Kh に同形式で現われる。

この他の *sogd.* 仲介変種として TVA には *toch.* 仲介定着形式 *samadi* の変種 *samar* がみられる。

*toch.* を仲介した変種としては *kzari*(Ma') *upasiki*(Tiś) を掲げることができるが, 何れも *sogd.* 仲介定着形式 *kraza* 及び *upasi* の変種である<sup>58)</sup>。

*skt.* を仲介した変種については 1.4.1.6 で示したが, 一般には *skt.* -a, -ā 語幹に対して -a の語末形式をとるものであって普通は *toch.* 仲介定着形式の変種である<sup>59)</sup>。

*skt.* を仲介した変種は TVIII に若干みられる (cf. 1.4.1.6)。

### 3.2 *uig.* 定着形式と蒙古語について

蒙古語仏典中にみられる *ind.* 来源語彙が如何なる経路を経て導入されたかという問題について詳細に研究されたことはない。しかし, 蒙古語仏典の大部分がチベット語から翻訳されているにも拘わらず, 多くの *ind.* 来

源語彙の形式が *uig.* 形式と類似しているということに関してはかなり以前から指摘されてきたし、若干の単語は *uig.* を仲介されたものと推定された<sup>60)</sup>。ところが、上で明らかにした *uig.* における結果を携えて蒙古語伝典中の *ind.* 来源語彙を概観したならば、そこには、別のルートから導入された単語形式によって散在的な切断はみられるものの、明らかに *uig.* の定着形式体系と窮えるところの一種の投影を確認することができる。そしてこれは、*uig.* と *mong.* の語末形式を対比することにおいて最も端的に映し出される。*mong.* における *ind.* 来源語彙の語末形式は大きく2つのタイプに分類できるが、1つは基本形である *skt.* からみて変形していない形式のタイプであり、もう1つは基本形を何れかの形に変形したタイプである。この第2のタイプに該当する単語は同じ基本形と対応する第1のタイプの単語と *mong.* 内で併存することもあるが、多くは定着形式としての立場を確立している。そしてこの第2のタイプこそ *uig.* の定着形式と一致するものといえる；

$R_1(a)$ ; *skt.* *anāthapiṇḍada*: *mong.* *anatabindati* ( $P_2$ ) *ānandita*: *anandati* ( $P_1$ ) *madhuranirghoṣa*: *madurnigosi* ( $P_1$ ) *ratnagarbha*: *ratnagarbi* ( $P_1$ ) *aśoka*: *asuki* ( $P_3$ )  $R_1(b)$ ; *nandā*: *nandi* ( $P_1$ ) *nandabalā*: *nandabali* ( $P_1$ )  $R_2(a)$ ; *parinirvāṇa*: *barinirvan* ( $P_2$ ) *candana*: *ćindan* ( $P_1$ ) *jetavana*: *citavan* ( $P_2$ ) *rājagṛha*: *rajaḡraq* ( $P_1$ )  $R_2(b)$ ; *pāramitā*: *baramid* ( $P_2$ )  $R_3(a)$ ; *kiṃnara*: *kinari* ( $P_1$ ) *asura*: *asuri* ( $P_1$ ) *sārthavāha*: *sartavaki* (MD) *garuḍa*: *garudi* (L)  $R_5$ ; *vaśavartin*: *vaśavarti* ( $P_1$ ) *utkhalin*: *udkali* ( $P_1$ ).

このことから更に第1のタイプには2種類の形式が含まれていることがわかる。1つに

は *uig.* 規則に従わない形式であって、恐らく *skt.* からの直接の反映形式と考えられるものであり (*uig.* の *skt.* に該当する cf. 1.4.1.6), もう1つは  $R_1(b)[-a]$   $R_4[-i/-u]$   $R_5[-C]$  のような規則に従ってはいるものの、又 *skt.* 形式とも一致する形式である。そしてこの後者の形式を上掲例のごとき形式に加えることによって *uig.* の語末規則体系と同体系が確立するのである。

更にこのような語末形式の規則性の一致と並行して、不規則形式あるいは音韻形態面での変形式においてさえ多数の一致を見ることができる；

不規則形式; *skt.* *gautama*: *mong.* *gautam* ( $P_1$ ): *uig.* *gautam kāśyapa*: *gaśib* ( $P_2$ ): *kaśip sumeru*: *sūmir* ( $P_2$ ): *sumir ānāgamin*: *anagam* ( $P_2$ ): *anagam sakṛdāgāmin*: *sagrđigam* ( $P_2$ ): *sakartagam bodhisattva*: *bodistv* ( $P_1$ ): *bodistv* 変形式; *piṇḍapāda*: *binvad* ( $P_1$ ): *pinvat kāśyā*: *karśa* ( $P_2$ ): *kraśa upāsaka*: *ubasi* ( $P_1$ ): *upasi upāsikā*: *ubasané* ( $P_1$ ): *upasané koṭi*: *kōlti* ( $P_1$ ): *kolti uṣṇiṣa*: *usnir* ( $P_1$ ): *usnir krakucchanda*: *krakasundi* ( $P_1$ ): *krksūnti trāyastriṃśa*: *istirivastiris* ( $P_1$ ): *strayastriś makara*: *matar* ( $P_1$ ): *matar*.

*mong.* 資料に関しては更に詳細な調査検討が必要であるが、以上の事柄から、*mong.* 内の *ind.* 来源語彙の多くが *uig.* 定着形式から直接に導入されたものであるという事実は理解される。恐らくこのような語彙は蒙古仏教成立の初期の段階に仏教用語として *uig.* から一括導入されたものと推定できる<sup>61)</sup>。そして基本的には *ind.* > *toch.* > *uig.* > *mong.* の経路を辿って *mong.* に借用されたという推定も又成り立つ。一方、この推定は、*uig.* 文献には既に残されていない多くの *ind.* 来源語彙に関して、*mong.* 資料から逆に、曾って

60) たとえば; N. Poppe, *Introduction to Altaic Linguistics*, 1965 Wiesbaden pp. 169-170.

61) 14世紀初頭ころまでに行われたカンジュル、タンジュルの *tib.* から *mong.* への翻訳に際しては、*tib.* だけではなく *uig.* *chin.* *skt.* などの言語に通じた多数の学者が動員されたといわれている。cf. 金岡秀友「蒙古文大蔵經の成立過程」『仏教史学』第六卷一号 1957 p. 47.

uig. に存在したと推定できる形式を再構することを可能にする; skt. *mārapramardaka*: mong. *mara-bira-mardaki* ( $P_1$  the name of Māra's son) < uig. \**mara-pira-mardaki* < toch. skt. *kaṅṭhaka*: mong. *kandik* ( $P_1$  the name of a prince's horse) < uig. \**kantik* < toch. skt. *pāṇḍava*: mong. *bandab* ( $P_1$  the name of a mountain) < uig. \**pantap* < toch. \**pāṇḍap*?<sup>62)</sup>.

#### 4. 結 論

以上, uig. に定着した ind. 来源の借用語彙が如何なる経路を辿って導入されたかという問題の解明を試みたが, その方法として予め仲介言語に toch. と sogd. の2言語を仮定し, その上で uig. の語末形式及び音韻形態面の特徴が両仲介言語と如何に一致しているかを考察してみた。その結果, uig. の定着形式語彙の仲介言語としては, chin. skt. などの存在も推定されるが (cf. 註55), 基本的には toch. がその役割を果し, sogd. がそれを補佐したということが証明された。

ところで, toch. 及び sogd. は 0. において仮定されたところの数種類の仲介言語候補の言語中から特に選択された言語であるが, ind. と uig. との間に仲介言語が存在したというのも又1つの仮定であった。そしてその仮定に基づいて上の事柄は証明されたのであって, もし来源である ind. 形式が toch. と基本的な一致を示し, uig. がその ind. から直接に導入されたものであるなら, uig. 語彙の形式は仲介言語に toch. を仮定した場合と結果的には同一の形式を呈することになる。しかしこのような懸念は一応次の理由によっ

て排払することができる。即ち, toch. と一致する uig. 形式の中には toch. と ind. との間に明らかにイラン系の言語である sak. を仲介したと推定されうる若干の単語形式がみられる; skt. *aviṅi*: uig. *aviṅ* < toch. *aviṅ* < sak. *aviṅi* < ind. skt. *makara*: uig. *matar* < toch. *matar* < sak. \**matar* < ind. skt. *piṇḍa-pāda*: uig. *pinvat* < toch. *pinwāt* < sak. *pāṇḍāvāta* < ind. etc.<sup>63)</sup>. このような例の存在は uig. 形式と toch. 形式との一致が一般に来源言語に遡って逆V字形をなすところの間接的一致ではなく, 同一直線上での直接的貸借関係による一致であるという事実を示すものと受けとれる。それ故, 上でなされた証明には既に仲介言語が存在したという仮定を前提とする必要はない。

仲介言語の決定にとって最もその効力を発揮したのは語末形式であった。これまで uig. と skt. の単語の同定に際して語末形式の相違は一般に無視されがちであったが, 両言語形式間における対応の規則性が解明された現在, uig. 形式が基本的には toch. を仲介したということ的前提として, 逆にこの語末形式の相違はこの同定の決定に不可欠の要員となりうる。たとえば, G.R. Rahmeti は ETŞ の中で *seker* という uig. 形式を skt. *śakra* に同定しながらもその註においてはこの uig. 形式が *śakri* とも読めると付記している (p. 393)。テキストの文脈から判断すればこの uig. 単語は王名を表示するものであって, 本来は語末形式規則  $R_1(a)$  に従うべき単語であるから, uig. 形式としてはむしろ *-i* の語末をとる註記の *śakri* を採用すべきであったということがわかる<sup>64)</sup>。このような誤読をな

62) toch. は一般に skt.  $-Vva$  の形式が  $R_2$  によって  $-Vv\#$  に変化した場合に最後の  $v$  を  $p$  にかえて  $-Vp\#$  の形式に改変する; *anāsvava*: *anāsvap* (AB) *svabhāva*: *svabhāp* (A).

63) これらの sak. 経由の toch. 例は Hn から引用した。

64) 更に ETŞ (p. 107) では *vandami* という uig. 形式が skt. *vandana* に同定されているが, *vandana* 'worship' は  $R_2(a)$  に該当するのでこれに対応する uig. の語末形式は普通は  $-\#$  が立ち,  $-i$  の立つことはない。更に  $n > m$  の音韻変化も一般的ではなかったところから, この uig. 単語は skt. *vandāmi* 「槃那寐」(*vand-* の 1 人称単数現在形) に同定すべき形式であると考えられる。

くすためにも今後新しい ind. 来源借用語に接しては先ず語末形式について考慮する必要があると考える。

これまでに、ウイグル仏教が基本的には如何なる経路を経て伝播されたかという問題についての明確なる解答は出されていない。しかし、ug. 内に定着した ind. 来源借用語彙が基本的に toch. を仲介した事実が明白にな

った現在、ウイグル仏教は、少なくともその初期の発展段階においては、トカラ仏教あるいはトカラ仏典の影響を直面に蒙ったであろうという推定は十分に可能である。そして定着形式の多くはその後 mong. に借用されるのであるが、このことは蒙古仏教の成立に際してウイグルが大きく関与していた事実を示すものといえるであろう。

## 参 考 文 献

### I

- Bang, W. and Gabain, A. v., Türkische Turfan-Texte I-V. *SPAW* 1929-1931. (TI-V).  
 Bang, W., Gabain, A. v. and Rahmeti, G. R., Türkische Turfan-Texte VI. *SPAW* 1934. (TVI).  
 Gabain, A. v., Türkische Turfan-Texte VIII. *ADAW* 1952. (TVIII).  
 —, Türkische Turfan-Texte IX. *ADAW* 1956. (TIX).  
 —, Türkische Turfan-Texte X. *ADAW* 1958. (TX).  
 —, *Maitrisimit* II. Berlin 1961. (Ma).  
 —, *Alltürkische Grammatik*. Leipzig 1950. (AtGr).  
 Haneda, T., 羽田 亨「回鶻文の天地八陽神呪経」『羽田博士史学論文集』下 1958. (SY).  
 Le Coq, A. v., Türkische Manichaica aus Chotco I *AKPAW* 1911 Anhang 1912, II *APAW* 1919, III *APAW* 1922. (MI-III).  
 Müller, F. W. K., Uigurica I-II *AKPAW* 1908 1911, III *APAW* 1920, IV *SPAW* 1931. (UI-IV).  
 Müller, F. W. K. and Sieg, E., *Maitrisimit und "Tocharisch"*. *SBAW* 1916. (Ma').  
 Nadeljaev, V. M., *Drevnetjurkskij slovar*. Leningrad 1969.  
 Radloff, W. and Malov, S. E., *Suvarnaprabhāsa*. St. Petersburg 1913-1917. (Suv).  
 Radloff, W. and Staël-Holstein, A. v., *Ṭiśastvustik*. St. Petersburg 1910. (Tiś).  
 Rahmeti, G. R., Türkische Turfan-Texte VII. *APAW* 1937. (TVII).  
 —, Zur Heilkunde der Uiguren I-II. *SPAW* 1930, 1932. (HI-II).  
 —, *Eski Türk Şiiri*. Ankara 1965. (ETŞ).  
 Röhrborn, K., *Eine uigurische Totenmesse*. Berlin 1971.  
 Shōgaito, M., 庄垣内正弘「ウイグル語写本・大英博物館蔵 Or. 8212 (109) について」『東洋学報』第56巻1号 1974. (BM1).  
 —「ウイグル語写本・大英博物館蔵 Or. 8212-108 について」『東洋学報』第57巻1, 2号 1976. (BM2).  
 —「ウイグル語写本・‘観音経相応’ —観音経に関する ‘avadāna’—」『東洋学報』第58巻1, 2号 1976. (BM3).  
 Tezcan, S., *Das uigurische Insadi-Sūtra*. Berlin 1974.

### II

- Bailey, H. W., Recent Work in "Tocharian". *TPS* 1947. (B).  
 Hansen, O., Tocharisch-iranische Beziehungen. *ZDMG* 94. 1940. (Hn).  
 Poucha, P., *Institutiones Linguae Tocharicae*. Pars I. Praha 1955.  
 Sieg, E. and Siegling, W., *Tocharische Sprachreste, Sprach B*. Göttingen 1949.  
 —, *Tocharische Grammatik*. Göttingen 1931. (ToGr).  
 Thomas, W., *Tocharisches Elementarbuch*. I, II. Heidelberg 1960, 1964.

## III

- Benveniste, E., *Textes Sogdiens*. Paris 1940. (Bn).  
 —, *Vessantra Jataka*. Paris 1946. (VJ).  
 Gauthiot, R., *Essai de grammaire sogdienne*. I 1914–1923, II Benveniste, 1929, Paris.  
 Gershevitch, I., *A Grammar of Manichean Sogdian*. Oxford 1954. (Ger).  
 MacKenzie, D. N., *The 'Sutra of Causes and Effects of Actions' in Sogdian*. Oxford 1970. (MK).  
 —, *The Buddhist Sogdian Texts of the British Library*. Acta Iranica 10, 1976.  
 Müller, F. W. K., *Sogdische Texte* I, II. Berlin 1913, 1934. (MüI, MüII).  
 Reichelt, H., *Die sogdischen Handschriftenreste des britischen Museums*. I, II. Heidelberg 1928, 1931. (R, RII).

## VI

- Ligeti, L., *Trésor des sentences; Subhāṣītaratnanidhi*. Budapest 1973. (L).  
 Poppe, N., *The Twelve Deeds of Buddha*. Wiesbaden 1967. (P1).  
 —, *The Diamond Sūtra*. Wiesbaden 1971. (P2).  
 —, *Zwei mongolische Übersetzungen des Kūṭāgāra Sūtra. Serta Tibeto-Mongolica; Festschrift für Walter Heissig zum 60 Geburtstag am 5.12.1973*. (P3).  
 Raghu Vira, *Mongol-Sanskrit Dictionary*. Śatapīṭaka no.5 New Delhi 1958. (MD).